

福島県広野町

東日本大震災の記録〔Ⅰ〕

『ふる里

“幸せな帰町・復興”への道のり』

平成27年3月11日

～東北に春を告げるまち～

福島県双葉郡広野町





発刊に寄せて

## ～避難から“幸せな帰町・復興”への歩み～



東日本大震災によって今日に至るまで尊い命をなくされた皆さまのご冥福をお祈り申し上げますとともに現在において避難生活を余儀なくされている皆さまに心からお見舞いを申し上げます。

このたび、平成26年3月までの3年間をまとめた「福島県広野町東日本大震災の記録Ⅰ」を発刊する運びとなりました。編集にご尽力を賜りました「広野町東日本大震災の記録編集委員会」の鈴木正範委員長をはじめ、委員の皆さまならびに貴重な資料や証言を頂いた皆さまに厚く御礼申し上げます。

平成23年3月11日、広野町を襲った震度6弱の激しい揺れと推定9メートルの巨大津波により、多くの家屋が倒壊、流失し、道路や上下水道などのライフラインも壊滅的な被害を受けました。原子力発電所の事故による大混乱のなかでふる里・広野町をあとにして、お互いに支え合い、皆さまから温かいご支援を頂き避難所での生活を乗り越え、今、私たちは“幸せな帰町・復興”への道のりの途にあります。汚染水の問題が収束せず廃炉までには長い期間が見込まれるなか、将来にわたり震災の記憶を風化させることなく確かな歩みを進めるためには、これまでの歩みを正しく捉え、世の中に伝え、後世に語り継いでいくことが重要だと考えます。4年間を振り返れば悲しく苦しい思いが去来しますが、全国の皆さまから頂戴したご支援に幾度となく胸が熱くなったことが心に蘇り、感謝の念に堪えません。

町に戻り生活を再開された方々、あるいは戻りたいという願いを持ちながらも町を離れた生活が続く方々が共に願う「希望」は、ふる里・広野町で震災前の生活を取り戻すことであり、昨年・平成26年末に、

『全町民の皆さま  
幸せな帰町・復興に向け  
ふる里にて共に歩みたいと願っております』

というメッセージを発信いたしました。

この願いをかなえていくために、本年1年間を“ふる里復興・再生「成長の年」”として位置づけ、希望に向けてまいった種が大きな実を結ぶように、一步一步着実に復興への歩みを進めてまいります。

「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし。」という吉田松陰の言葉がありますが、夢を持つことの大切さを忘れず、夢を持つことの大変さをかみしめ、けいおう かいらい継往開来、ふる里の歴史を守りつつ世界に誇るべき「ふる里・広野町」を創り出し、未来へ届けてまいりたいと存じます。

「為せば成る為さねば成らぬ何事も」の精神をもって全力で取り組んでまいりますので、今後とも一層のご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成27年3月11日

広野町長 遠藤 智

# 目次

## I 広野町の状況

### 1 広野町の概要

- (1) 面積・人口
- (2) 町の位置・地勢
- (3) 原子力発電所からの距離

### 2 地震・津波による被害状況

### 3 避難所の概要

- (1) 一次避難
- (2) 二次避難
- (3) 三次避難

## II 震災からの経過

～3年間の歩み～

## III 「あのとき私たちは」

～30人の証言～

## IV 資料

### 1 義援金など

### 2 人的支援

### 3 物的支援

### 4 三郷市

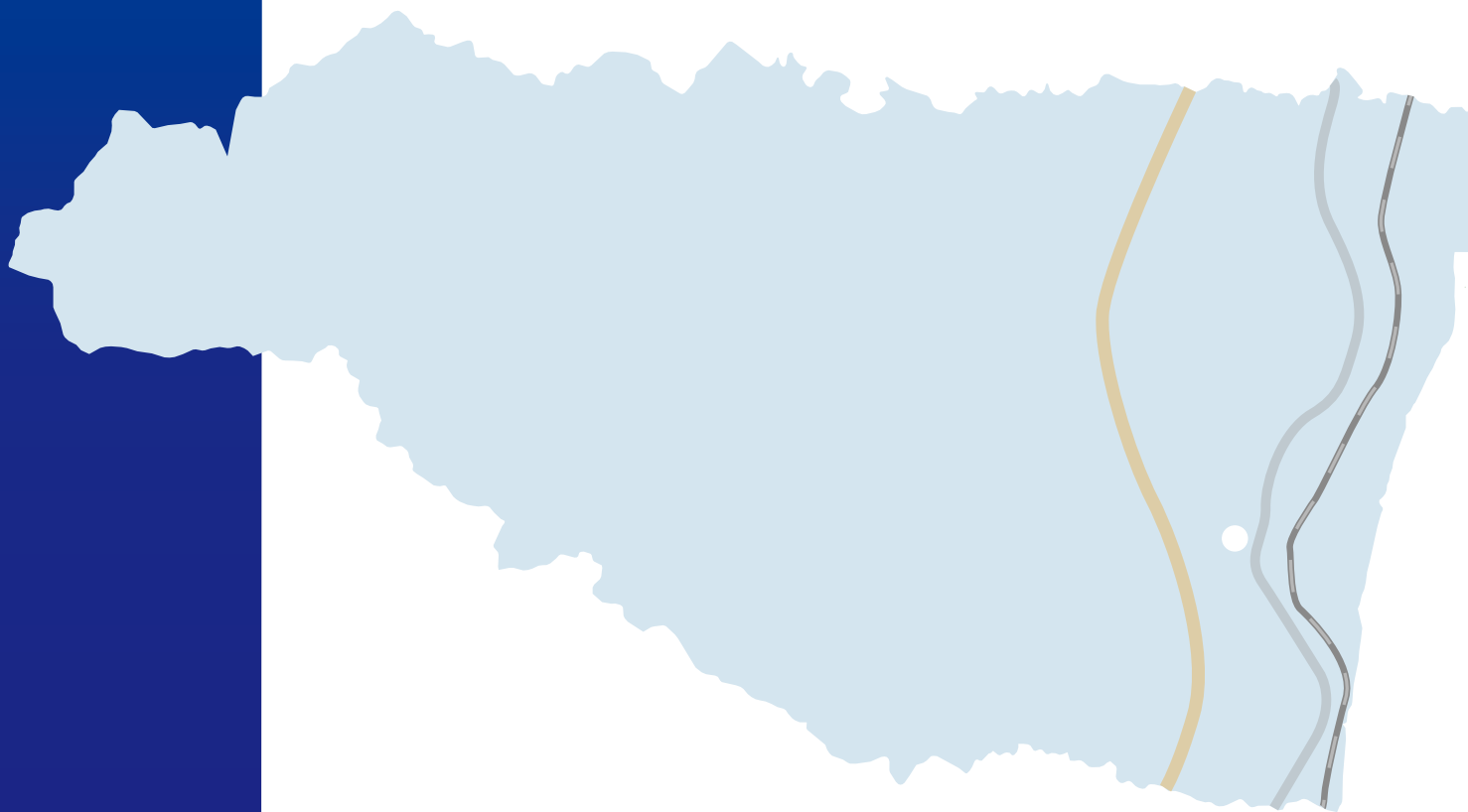
### 5 伊東市

## V 写真で見る東日本大震災



# I 広野町の状況

- 1 広野町の概要
- 2 地震・津波による被害状況
- 3 避難所の概要



# 1 広野町の概要

## (1) 面積・人口

■面積：58.69km<sup>2</sup>

■人口：5490人

■世帯数：1989世帯

(※平成23年3月11日時点)

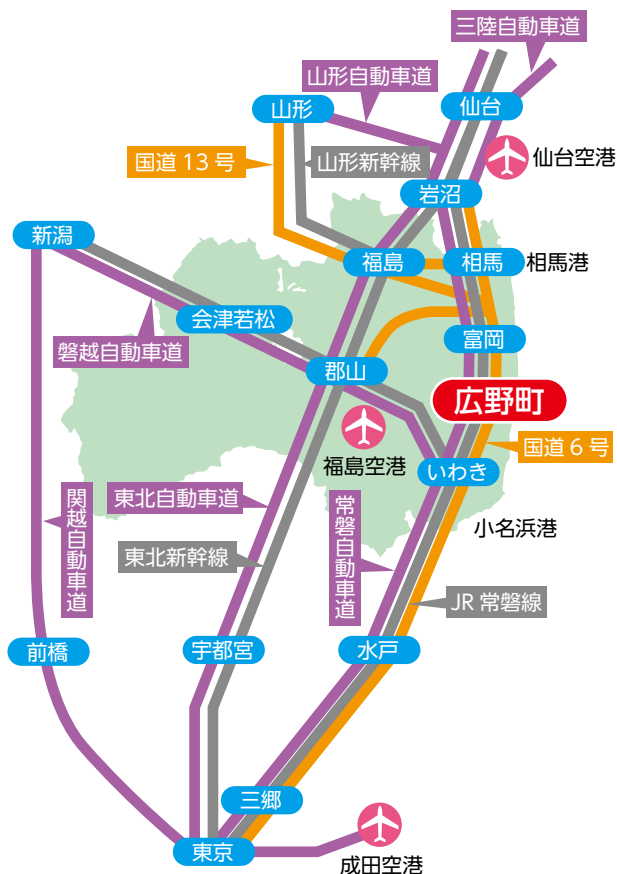
## (2) 町の位置・地勢

町は福島県浜通り地方の中部、双葉郡の最も南に位置し、東は太平洋、西には阿武隈山脈が連なり、東西13km、南北7kmの広さである。

西端は、東経140度52分10秒でいわき市に接し、東端は141度01分50秒で広野火力発電所の突端になる。

太陽の南中高度は夏至のとき約76度、冬至には最低約30度となり、この範囲内で季節により少しずつ移動する。

山は五社山、北迫川・浅見川・折木川の3つの川と、二ツ沼・西の沢池の沼地などがあり、温暖で寒暖の差が少ない気候である。



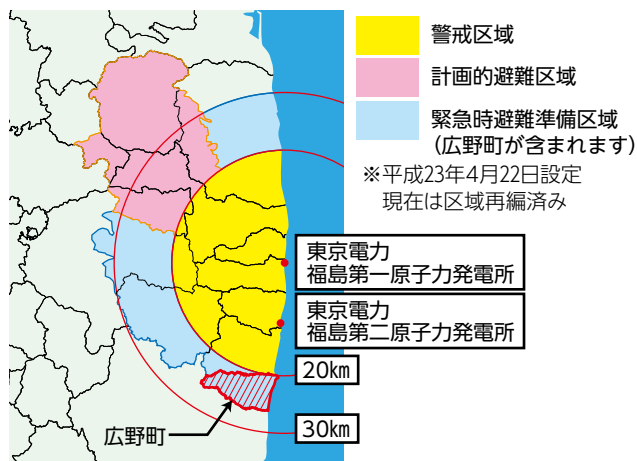
## (3) 原子力発電所からの距離

### ① 福島第一原子力発電所

町は、福島第一原子力発電所からおおむね20~30km圏内に位置している。

### ② 福島第二原子力発電所

町は、福島第二原子力発電所から町の一部が10km圏内に位置している。



## 2 地震・津波による被害状況

平成 23 年 3 月 11 日（金）14 時 46 分、三陸沖を震源とする国内観測史上最大規模の大地震（マグニチュード 9.0）が発生。

この地震で、広野町は、2 分程度の激しい横揺れに襲われ、震度 6 弱を観測した。

地震発生からおよそ 45 分後に推定 9 m の津波が押し寄せ、久保・本町地区をはじめとする沿岸部において甚大な被害をもたらした。

これら一連の地震と津波により、電気や上下水道などのライフラインが壊滅状態に陥った。



広野駅の線路を境に東側は津波により浸水（3月11日）



津波により浸水した久保地区（3月11日）

### ●東日本大震災による被害状況

（平成26年 3月31日時点）

区 分		被 害 数	備 考
人 的 被 害	死者	2人	震災関連死 38人
	行方不明者	1人	
住 家 被 害	全壊	113世帯	
	大規模半壊	35世帯	
	半壊	181世帯	
その他の被害	道路	町道15か所	被害額 1億2800万円
	下水道	下水処理場 1 棟全壊、町内管路損傷	被害額 8億8900万円
	町営住宅	浜田住宅全壊、大平住宅・虻木住宅・桜田住宅損傷	被害額 3億 430万円
	教育施設	3 棟ほか	被害額 1億3200万円
	農地	44ヘクタール	被害額 8億3800万円



二ツ沼総合公園付近の国道 6 号線が崩落（3月11日）

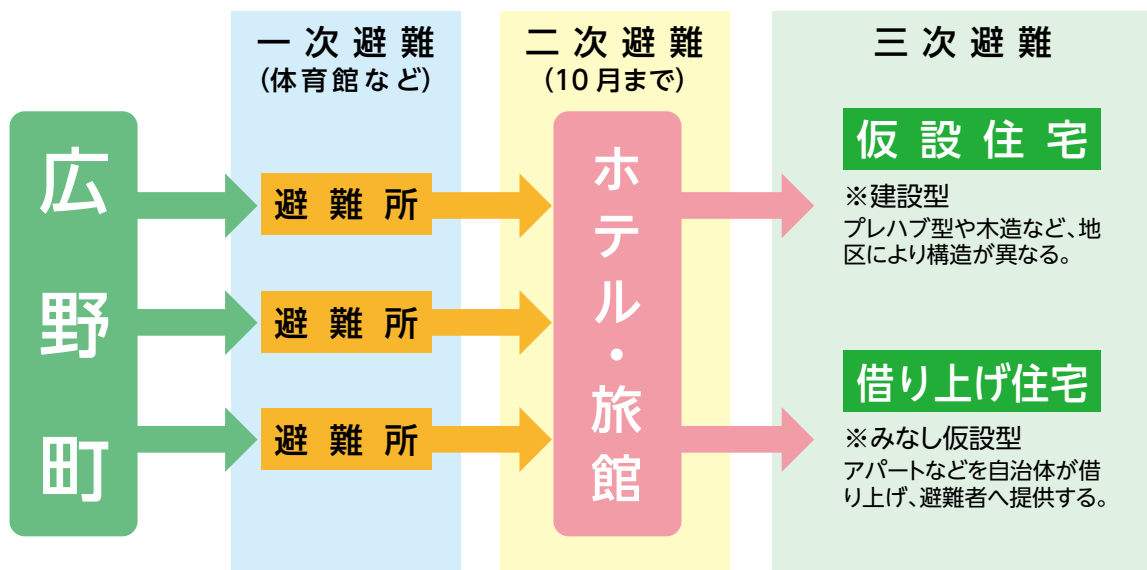


地震により書類が散乱した役場庁舎（3月11日）



津波の被害を受けた下水処理場（3月13日）

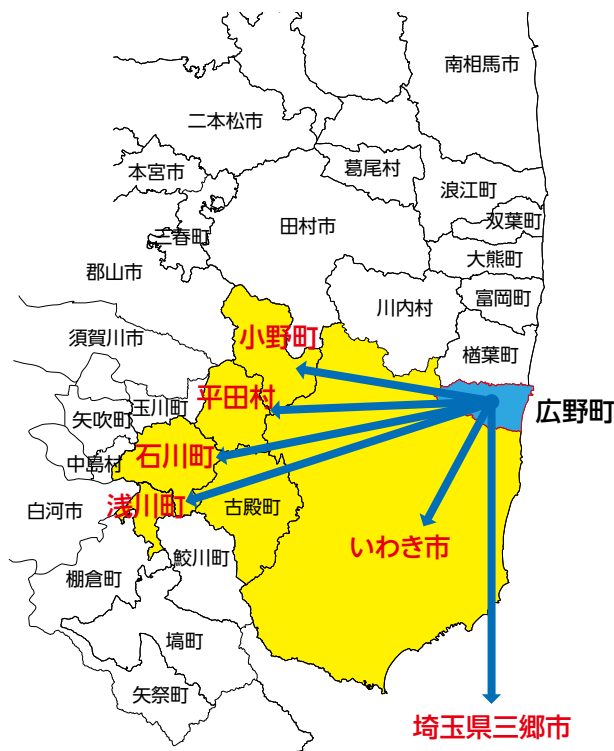
### 3 避難所の概要



広野町における避難フロー図

#### (1) 一次避難

避難指示発令後、役場機能を田村郡小野町（広野町から西へ50kmの町）に移転。田村郡小野町、石川郡平田村、石川町、浅川町、いわき市、埼玉県三郷市に一次避難所を設置。



一次避難所への主な流れ

## (2) 二次避難

平成23年4月9日から、田村郡小野町、石川郡平田村、石川町、浅川町、いわき市、埼玉県三郷市の各避難所からホテル、旅館への二次避難を開始。

●地域別避難者数（平成23年6月13日時点）		
いわき地区（いわき市）	11か所	516人
石川地区（石川郡石川町）	8か所	397人
東白河地区（東白川郡棚倉町、塙町）	7カ所	94人

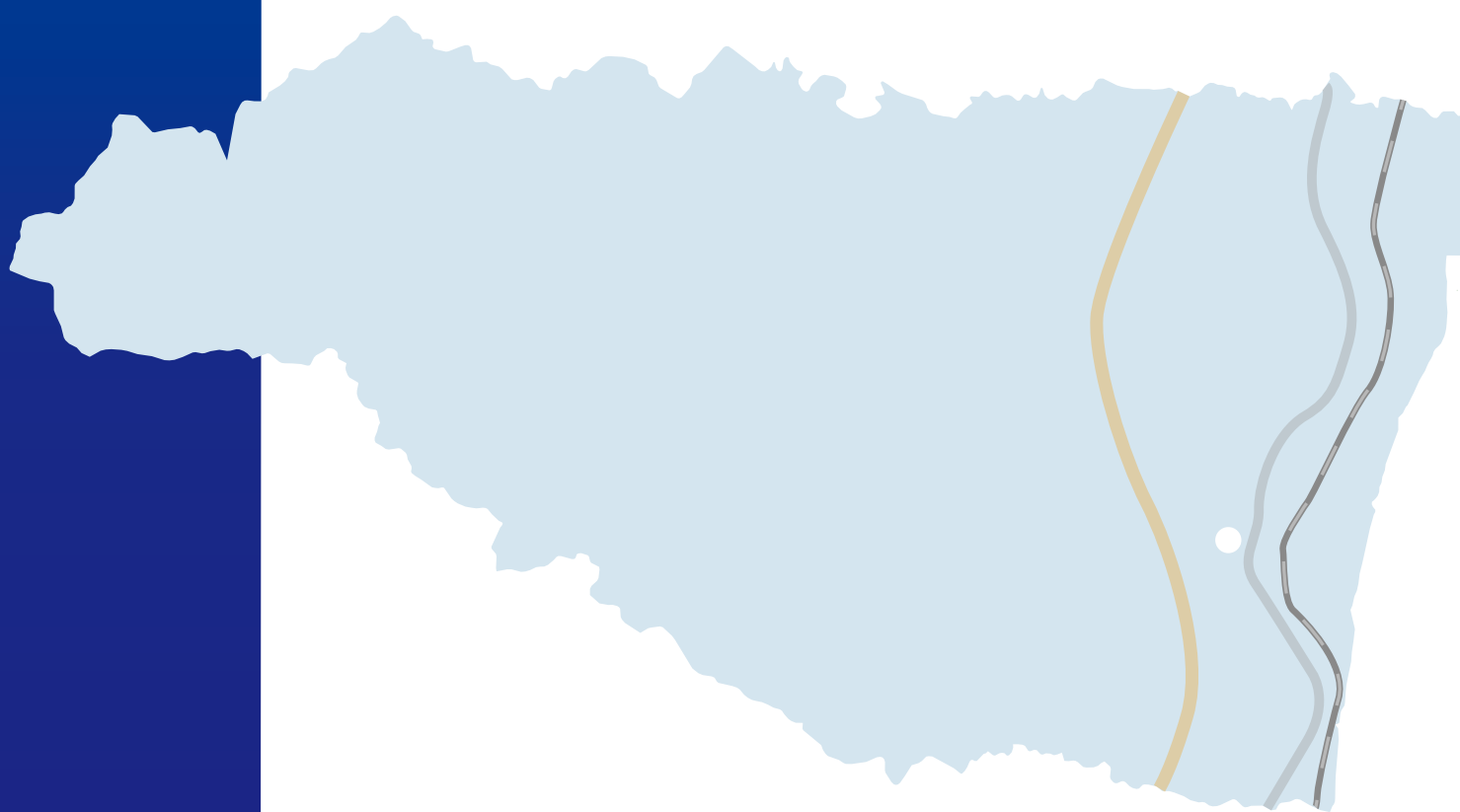
## (3) 三次避難

二次避難よりも自立度が高まる避難者支援として、応急仮設住宅においては、平成23年6月30日にいわき市中央台高久地区の応急仮設住宅への入居を皮切りに、三次避難を開始。

平成26年3月31日時点		
区 分	戸 数	人 数
応急仮設住宅	639戸	1470人
借り上げ住宅	641戸	1682人



## Ⅱ 震災からの主な経過 ～ 3年間の歩み～



## 人口5490人 世帯数1989世帯 (平成23年3月11日時点の住民基本台帳)

平成23年 3月11日(金)

- 14:46 ● 三陸沖を震源地とするマグニチュード9.0 震度6弱の地震発生(2分程度の激しい横揺れ)
  - 自家発電機が稼働しテレビから情報を得る
- 14:49 ● 太平洋沿岸に大津波警報発令
- 14:50 ● 防災行政無線により避難広報
- 14:55 ● 災害対策本部設置(町長室)
- 15:00 ● 消防団員、町職員による広報および避難誘導
- 15:30 ● 推定9mの巨大津波襲来
  - 被害の状況:死者2人・行方不明者1人・家屋の倒壊、流失約240棟
  - 町内のライフライン(上下水道、道路、電気、電話)ほぼ壊滅状態
  - 老人福祉センター・公民館・各地区集会所などを避難所として準備



津波が久保地区を襲う  
(双葉地方広域市町村圏組合消防本部提供)

平成23年 3月12日(土)

- 7:45 ● 福島第二原発から10km圏内に屋内退避指示発令
- 9:00~ ● 消防団による津波の行方不明者捜索(1人の遺体収容)
- 15:36 ● 福島第一原子力発電所1号機

で爆発音、白煙が発生

- 17:39 ● 福島第二原子力発電所から10km圏内避難指示(国からの情報が受信できず)
- 18:25 ● 福島第一原子力発電所から20km圏内に避難指示(国からの情報が受信できず)
  - 防災行政無線で町外への自主避難を呼びかける
  - 役場庁舎の福島県総合防災システムが機能せず
  - 役場庁舎内停電(外部からの情報が入手できない状態となる)
- 21:00 ● 東京電力福島第二原子力発電所の社員3人が来町し第二原発の状況を町長へ報告
  - 警察から楢葉町の道の駅に避難した人の受け入れの要請を受ける

平成23年 3月13日(日)

- 9:00~ ● 消防団による津波の行方不明者捜索(1人の遺体収容)



消防団・自衛隊による行方不明者捜索

- 11:00 ● 全町民に避難指示を発令(町長)
  - 防災行政無線にて町外への避難を呼びかける
- 14:00 ● 交通手段のない町民に対し児童館・保健センターへ集合を周知



- 消防団などによる原子力災害避難誘導(家庭訪問)

19:40 ● 三郷市より食料、毛布などの支援物資、給水車の支援を受ける

21:00 ● 南会津振興局よりおにぎり(1400個)の支援



食料、毛布などの支援物資を運んだ三郷市の車両

### 平成23年 3月14日(月)

- 11:01 ● 福島第一原子力発電所3号水素爆発
- 小野町避難所へ町バスなどで町民を搬送(第1便13:15 第2便15:00)

### 平成23年 3月15日(火)

- 6:14 ● 福島第一原子力発電所2号機爆発音(圧力制御室が破損)
- 福島第一原子力発電所4号機で爆発音(建屋の壁が大破)
- 9:38 ● 福島第一原子力発電所4号機で出火
- 11:00 ● 福島第一原子力発電所から20~30km圏内屋内退避指示発令
- 役場機能および災害対策本部を小野町町民体育館へ移転
    - 消防団本団常駐
  - 小野町・平田村・石川町・浅川町・福島高専・三郷市の避難所を町避難所として指定
  - 小野町避難所/本部対策班
    - 総務班 救護班 物資班 調理班を編成する

### 平成23年 3月17日(木)

- 福島工業高等専門学校から三郷市瑞沼市民センターへ避難を希望した町民を移送(三郷市で準備したバス6台)

### 平成23年 3月20日(日)

- 特別養護老人ホーム「花ぶさ苑」入所者37人全員を宇都宮市へ搬送

### 平成23年 3月21日(月)

- 高野病院の一部の入院患者60人を茨城県へ搬送

### 平成23年 4月9日(土)

- 避難所から旅館、ホテルなどへの二次避難開始

### 平成23年 4月11日(月)

- 17:16 ● 浜通りで震度6弱の余震(スパリゾートハワイアンズなど被害甚大/津波の発生なし)

### 平成23年 4月15日(金)

- 役場機能を小野町からいわき市常磐地区(湯本支所を設置)へ移転



4月15日から湯本支所を開設

### 平成23年 4月22日(金)

- 広野町全域が緊急時避難準備区域に指定される

平成23年 5月1日(日)

- 賃貸住宅入居への補助制度開始

平成23年 5月2日(月)

- 小野町町民体育館(避難所)撤退



多くの町民が避難した小野町体育館

平成23年 6月10日(金)

- 富岡消防署榎葉分署再開(長畑、二本櫛集会所を待機所)

平成23年 6月30日(木)

- 中央台高久地区応急仮設住宅への入居開始
- ライフライン(上下水道、道路、電気、電話)仮復旧する

平成23年 7月28日(木)

- 静岡県伊東市と広野町における「災害時等の相互応援に関する協定書」調印式

平成23年 8月18日(木)

- 常磐迎地区応急仮設住宅への入居開始



8月18日から入居開始した常磐迎応急仮設住宅

平成23年 8月25日(木)

- 広野小学校をいわき市立中央台南小学校で再開

平成23年 9月30日(金)

- 緊急時避難準備区域解除

平成23年 10月1日(土)

- 建設課内に除染対策グループを設置
- 広野中学校をいわき市立湯本第二中学校で再開

平成23年 10月10日(月)

- JR常磐線久ノ浜駅～広野駅間運転再開

平成23年 10月12日(水)

- 広野町内文教施設除染作業委託業務開始

平成23年 10月17日(月)

- 四倉鬼越地区および工業団地応急仮設住宅への入居開始

平成23年 10月27日(木)

- 緊急時避難準備区域解除に伴う住民説明会(いわき市立中央台東小学校体育館)



住民説明会の様子

平成23年 10月31日(月)

- 二次避難所(旅館・ホテル)完全閉鎖

平成23年 11月24日(木)

- 除染モデル実証事業開始

平成23年 12月1日(木)

- 除染対策グループが広野町での業務開始
- 産業グループ・建設グループが順次移転開始

平成24年 2月16日(木)

- 一般住宅などの広野町除染作業委託業務開始

平成24年 3月1日(木)

- 役場機能をいわき市常磐地区(湯本支所)から本来の庁舎へ戻す
- 湯本支所を出張所とする

平成24年 3月25日(日)

- 避難指示解除に向けた住民懇談会(広野中学校体育館)

平成24年 3月31日(土)

- 町長発令の避難指示解除
- 町民帰還に向けた町長メッセージ(第1弾)

平成24年 4月1日(日)

- 建設課内に復興建設グループを設置

平成24年 5月28日(月)

- 町内の応急仮設住宅への入居開始(2か所、46戸中13世帯)

平成24年 6月1日(金)

- 町民バス運行再開

平成24年 6月2日(土)

- 学校再開に関する保護者説明会(広野町役場湯本出張所)

平成24年 6月26日(火)

- 福島第一原子力発電所視察(町幹部、町議会)

平成24年 7月11日(水)

- 浄化センター再稼働

平成24年 7月21日(土)

- 第1回ひろの復興市

平成24年 7月31日(火)

- 湯本出張所閉鎖



平成24年 8月27日(月)

- 広野小・中学校、幼稚園、保育所が町内で再開

平成24年 10月27日(土)

- 帰還に向けた住民説明会(広野町中央体育館)

平成24年 11月1日(木)

- 農地除染を開始

平成24年 11月9日(金)

- 災害公営住宅建設事業に着工

平成24年 11月26日(月)

- 広野町復興整備協議会を設立

平成25年 1月1日(火)

- 東京電力(株)福島復興本社がヴィレッジで設立

平成25年 1月20日(日)

- 減容化処理施設建設説明会

平成25年 5月18日(土)

- 広野小学校運動会を震災後初めて町内で開催

平成25年 7月1日(月)

- 震災後初めての広野小学校、広野中学校プール開き
- 広野町保育所で給食再開

平成25年 8月11日(日)

- 広野町サマーフェスティバル2013 (サマーフェスティバルの復活)

平成25年 8月24日(土)

- 保健センターでホールボディカウンターによる内部被ばく検査を実施

平成25年 9月25日(水)

- コメの全量全袋検査を開始

平成25年 9月26日(木)

- 広野町災害公営住宅建築工事起工

平成25年 10月19日(土)

- ふたばワールド2013が町内で開催(ふたばワールドが14年ぶりに復活)

平成25年 10月25日(金)

- 総理官邸で広野産米をPR

平成25年 11月4日(月)

- ニツ沼総合公園パークゴルフ場を再開

平成25年 11月27日(水)

- 3年ぶり収穫のコメ全量全袋検査が完了(収穫した1万8619袋、約558トンが全て基準値内)
- 宮内庁に贈呈した広野産米が皇居に届けられ、天皇皇后両陛下が召し上がったと報道

平成25年 12月3日(火)

- 福島県知事が県議会で中高一貫校を広野町に設置することを表明

平成25年 12月17日(火)

- 震災後初めてみかんの丘で町民対象のみかん狩りを実施

平成26年 1月19日(日)

- 広野町消防団、婦人消防隊の出初め式と震災後初のパレードを実施

平成26年 1月30日(木)

- 広野小学校5・6年生が常磐自動車道広野IC~常磐富岡IC間再開通祈念植樹を実施

平成26年 2月20日(木)

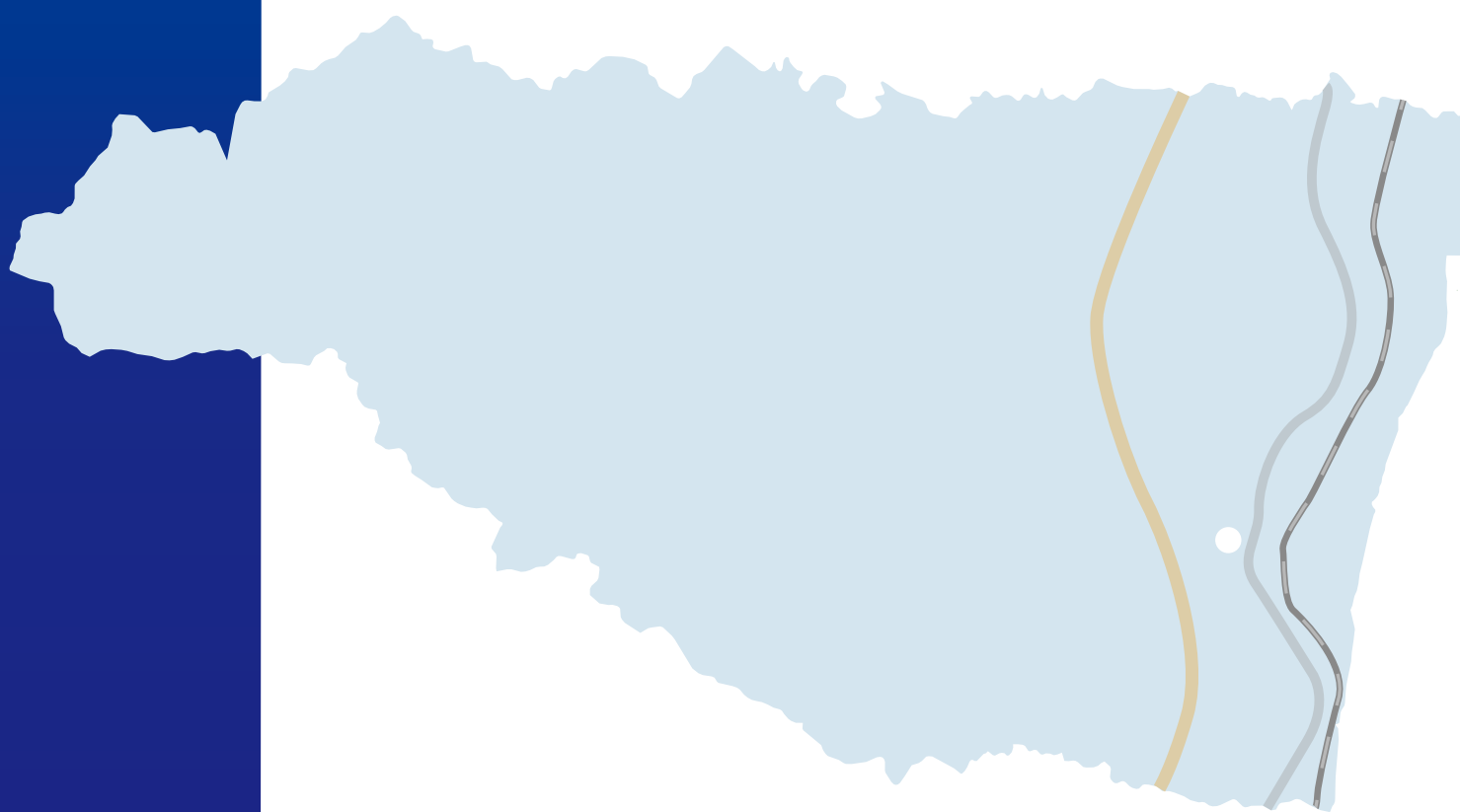
- 災害・除染廃棄物仮置き場と中高一貫校に関する住民説明会(28日まで6回)

平成26年 3月11日(火)

- 東日本大震災追悼式

# Ⅲ 証言「あのとき私たちは」

～30人の証言～







## 避難当初は ご飯が食べられない日も

おおわだ まこと  
大和田 慎さん  
(広野町社会福祉協議会 事務局長)

震災時は休暇中で家族と一緒に出かけ  
ていました。地震発生後すぐにでも戻りた  
かったのですが、高速道路が閉鎖されたた  
め、千葉県から約15時間かけて福島県に  
戻ってきました。携帯電話で広野町社会福  
祉協議会の状況を確認したら、デイサー  
ビスセンターの利用者さんと津波で避難  
してきた高齢者7人を連れて、いわき市  
の草野小学校に避難していました。13日  
の朝合流して、デイサービスセンターの  
所長と2人でしばらくの間、高齢者のお世  
話をするようになりました。車いすの人  
や認知の人もいたのですが、みんな今後  
どうなるんだろうと不安な様子でした。  
食事については、自衛隊が水とおにぎり、  
炊き出しを小学校で配ってくれました。

おにぎり1人1個を高齢者に渡してまた  
並ぶということを繰り返し、何とか高齢者  
分を確保しましたが、私たち職員の分は手  
に入らず、2日間ぐらいは何も食べずにし  
のいでいました。

小学校は和式のトイレしかなく、車いす  
の人もいたので、町長に掛け合って13日  
の夜に広野町老人福祉センターへ戻りまし  
た。

そこには厨房施設があり、水も若干はあ  
り、さらに役場に行って支援物資をもらい  
ましたし、お弁当屋さんが開いていたので  
温かいおにぎりを購入できました。15日  
に役場ごと小野町に避難することになり、  
ついていくことになりました。

小野町の避難所では、最初は食料は少な  
く、お風呂にも入れず、とても寒いのにス  
トーブをたきたくても油がないというよう  
な状況が、1週間か10日間は続いていま  
した。

私も何日間かご飯が食べられず、体育館  
にある町の対策本部ですら賞味期限の切れ  
た菓子パン2個というような日が続きまし  
た。

そののち、支援物資でカップ麺が届き、  
自前で炊き出しが始まって、温かい味噌汁  
が出た時はみんな拍手がおき、そのくらい  
うれしかったです。お年寄りも、冷たいお  
にぎりをかじっていたときとは、表情が  
まったく違いました。2週間くらいたつと  
役場の方も落ち着いてきて、近くの商店街  
からお肉を頼んだり、食事の内容もだい  
ぶ良くなってきました。お風呂も、小野町  
の施設が無償で提供してくれました。



# 患者さんと一緒に避難生活

おがやま ひろゆき  
小鹿山 博之 さん  
(馬場医院 院長)

私は震災の翌日から、妻の実家などに避難しましたが、金沢の実家に家族を預けて、3月18日に福島に戻りました。

一次避難所である小野町体育館から二次避難所である借り上げ旅館と、町の人たちと寝起きを共にしました。

血圧を測ったり、薬を配布したりするだけで、それ以上の何ができるわけでもありませんでしたが、いないよりはましだろうとの思いからでした。

応急仮設住宅が完成するころ、広野町のインフラも復旧し、私は平成23年8月に自宅に戻りました。以来、町に戻られた方々の診療と応急仮設住宅への訪問診療を2日、後方支援病院の手伝いを2日という変則的なスケジュールで始めましたが、町への帰還者が増えるのに合わせ広野町での診療時間を増やし、そんなこんではや4年がたとうとしています。私は、町の方々と一緒に働けたこの時間を本当にうれしく、感謝の気持ちを持って思い返しています。

自宅に戻られることを切望しながら、ついに避難先でお亡くなりになった方も多く、その無念さはいかばかりであったかと思えます。今回の原発事故の罪深さに改めて憤りを覚えます。「絶対安全とあれほど大見えを切っていたのはいったいなんだったのか」との思いは多くの方に共通のもの

だと思えます。しかしその一方で、二次避難所の温泉宿にお世話になっていた時、朝方誰もいない大浴場で鏡面のような水面をぼんやり眺めていて、ふと考えました。差し渡し約10メートルの大浴槽を太平洋に見立てると、200万分の1のスケールです。

すると、あの高さ20メートルともいわれる大津波は、0.01ミリメートルでもはや観察不可能です。考えられないほどの甚大な被害をもたらした今回の津波を、われわれは「未曾有の」とか「想定をはるかに超えた」と嘆き、自然の仕打ちの過酷さを呪います。

しかし、不謹慎な言い方かもしれませんが、太平洋はあの日もいつもと同じ海だったのではないのでしょうか。このことを先日恩師に話してみたら「自然は人間が対峙できる相手じゃない。東電の予測の甘さや事前の対策のお粗末さが非難されているけれども、本質的な問題とは思えない」と言われました。

仕方がなかったのだから諦めろなどと短絡的な結論に持っていくつもりは毛頭ありませんが、不毛な責任者の糾弾はそろそろ終わりにし、実効ある復興への努力にこそ力を注ぐべきだと思います。



## 働いていた工場は再開できず

かげ やま とし お  
影山 年雄 さん  
(楢葉町の職場で被災)

東日本大震災当時は楢葉町にある縫製工場に勤務していて、平成23年3月11日は勤務中に最初の地震が発生しました。

立て続けに3回大きな揺れが来て、工場で働いていた人はほとんど外に逃げました。

私は10メートル以上もある重い裁断機などを倒れないように支えていました。

下駄箱のそばで震えている2人に外へ出るよう叫びましたが、萎縮して動けません。

運良く下駄箱は倒れませんでした。

停電で機械が止まったため、午後3時ころにはみな帰りました。

何も情報がなかったので、翌12日も仕事に出ましたが、会社で南の方へ逃げるよう役場からの放送があったと聞いて、午前9時ころから車3台でいわき市へ逃げました。

避難所を回ると草野小学校、平第三中学校はいっぱい、最後に行った高久北小学校に着いたのが午後9時ころでしたから、12時間走っていたことになります。

楢葉町の人はこちらから会津に向かうこと

になりましたが、広野町の方は福島工業高等専門学校に行くよう言われ、福島高専へ行きました。

福島高専は水が出なかったので、17日ころから10日間くらいいわき市勿来の姉の家に身を寄せました。

それからまた福島高専に戻り、いわき市内のホテル浜徳、石川町の八幡屋、いわき市新舞子のかんぽの宿を転々とし、最後に応急仮設住宅に落ち着きました。

工場で一緒に働いていた人はバラバラになり、社長も避難して楢葉町の工場は再開できません。

私は震災後病気になって働けなくなりました。

今までやっていた仕事なら辛うじてできるかもしれませんが、これから新しい場所へ移って、別の縫製工場で働くこともできないし、その意志もありません。

災害に対する賠償のあり方は、根本的に変えてもらいたいと思っています。





# 絶対ということは この世の中にある

かざわ いちろう  
賀澤 一郎 さん  
(自宅で被災)

私は震災後、津波警報のため自宅に入らず、最初は町内の親せき宅に身を寄せました。3月15日に津波警報が解除されたので、午前5時ころ自宅に戻ってがれきの山から運転免許証と健康保険証を見つけたのが午前11時ころでした。11時25分ころ避難を呼びかける防災無線を聞き、まっすぐ福島工業高等専門学校へ行きましたが、スクリーニングで着替えろと言われました。このときの放射線量は毎時50マイクロシーベルトとも言われています。

17日、福島高専から三郷市の瑞沼市民センターに入りましたが、そこでこれでもかというくらいのもてなしを受けました。

最初はおにぎり弁当でしたが、普通の食事ができるようになり、そのうちおやつまで出るようになって、こんなにしてもらっていいのかなと思うくらいでした。

避難所に入った次の日から、近所の人からトイレットペーパーあるから持ってきたよとか、ティッシュペーパー余ったのがあるから持ってきたよといった具合で、見る間に物を置く部屋がいっぱいになりました。

避難所にいてもやることがないので、夜、酒を飲みに行く人、昼間パチンコをやる人がいて、女性は化粧して買い物へというようななかで、4月末、三郷市の社会福祉協議会の集まりがあったとき、その席上で避

難民とはいえ、このような生活実態を見てどうして世話をしなければならないのかという話があったと、後で役場職員から聞きました。その話を聞いた当時は、私たちは原発が壊れやむなく避難しているという、被害者意識しか頭にはありませんでした。何もやることがないなかで、しょうがないだろうなという気持ちでしたが、時間がたった今では、それはそうかもしれないという思いにはなっています。

日本の科学技術は素晴らしいものだと言われてきて、原子力発電所についても絶対安全だと言われてきました。私も東京電力の子会社に20数年勤めていて、発電所の中で働いていました。作業員さんの安全を確認してから工事を始めるのですが、発電所は絶対事故は起きないという前提でした。

今にして思えば、そんなことはありえないだろうと思います。絶対ということは、この世の中にはないんだという前提で生活を組み立てていくことが大切だと思います。

ドイツでは原発を最終的にどう解体するのかを決めてから動かしてきたので、今予定どおりの解体をしているといえます。日本では間違いなく見切り発車で、最終処分地下に何十万年も埋めることに誰が責任を持つのだろうかという疑問に思います。責任を持ってないことはやるべきでないと思います。



# 何かしたくて思いついた炊き出し

かなり  
金成 サキさん  
(炊き出しに参加)

平成23年3月11日に地震が起こったときは、買い物の帰りで自宅近くのJAふたば広野支店の辺りにいました。持病があるため、最初地震だということが分からず、目まいだと思いました。帰宅して玄関を開けると家の中はめちゃめちゃになっていて、飼い犬を呼んでも出てきませんでした。停電はしていませんでしたが、電話は通じませんでした。

外に出て近所の人と立ち話をしているとザワ〜と音がしました。その時海の方を見ると津波が線路の近くまで来ていたので、急いで丘の上の広野町老人福祉センターへ歩いて逃げました。普段から日本赤十字社の奉仕活動でなじみがあったのと、そこへ行けば何かできると考えたのです。

老人福祉センターには炊き出しができる道具と材料がそろっていたので、係の人たちが「炊き出しをしよう」と話し、汁物なら500食分くらい入る大きな鍋を使って、屋外で豚汁を作りました。ほかのグループ

はおにぎりを作っていました。料理している途中に、目まいがしたので休んでいると、海を見ていた人たちが津波の恐ろしさを話していました。夕方豚汁を配って、近くの広野町保健センターでおにぎりをもらいました。老人福祉センターは停電、断水の状態でしたが、その晩はそこに泊まりました。

翌日原発事故が発生したと聞かされ、老人福祉センターのバスで石川町の総合体育館に避難しましたが、近所の人と一緒にだったので、とても心強かったです。犬は近所の人が見つけて、連れてきてくれました。

石川町には2週間くらいいて、身内に誘われて東京都、埼玉県、小野町と移りましたが、避難先の住宅事情や通院の都合があり、いわき市の応急仮設住宅に落ち着きました。震災後は娘から携帯電話を預けられ、今は便利に使っています。

あの時は、石川町の皆さんや多くの人のお世話になり、感謝しています。



## 新しい学校は青少年の視点で

きむら もとや  
木村 元哉 さん  
(広野中学校3年生(当時))

震災当日は、ちょうど自分自身の中学校の卒業式でした。祖母の家が広野町の駅前にあって、そこに友達といつも集まって遊んでいました。当日も、10人ほどと集まって、いつものとおり遊んでいたら、大きな地震が起こって、みんなと祖母を家の外に避難させて、祖母が通帳や印鑑を取りに戻るといふのを引き戻して、揺れが収まったあとは祖母を友達に託して、中学校の方に避難させました。

商店街など近所の人が残っていると思ったので、私は駅前の辺りにとどまり、逃げてくださいと声をかけてまわりました。1年から2年たって、そのときに声をかけた人が実家にわざわざお礼を言いに来てくれて、涙ぐんで「あのときはありがとう」と言ってくれて、こちらまで涙ぐんでしまいました。

高校は、推薦入学で大熊町にある高校に決まっていたのですが、部活動、修学旅行など、サテライト高の高校生活がどうなるか、その当時は分からなかったもので、かなり悩

んだ末いわき市内にある高校に編入しました。

高校時代は、双葉郡子供未来会議に参加しました。大人の目でなく、自分たち青少年の視点で双葉郡の学校はこのようなものであってほしい、こういう制度があったらいいという思いを、文科省や教育委員会に直接言いたかったからです。県立中高一貫校については、「給食をバイキングにしては」「温泉を作って住民も利用できるようにしたら中高一貫校が学校、住民、町をつなぐポイントになるのでは」という思いもよらぬ意見が出ました。

大学に進学して、広野町サマーフェスティバル実行委員を務めましたが、相手がどんな偉い人でも、みんな小さいころからお世話になっているおじさん、おばさんなので、物おじせず自分たちが楽しみたいという気持ちで、話し合いました。これからも、そうやって若い自分の考えを、古里の未来に反映させていきたいと考えています。



## 震災による町の変化に戸惑う

くが みえこ  
久賀 三枝子 さん  
(国道6号線を運転中に被災)

平成23年3月11日、最初の地震が来たときは富岡町で開かれた会議の帰り道で国道6号線を運転中でした。携帯電話には緊急地震速報は入りませんでした。突然の揺れで運転できる状況ではなかったので、道路の脇に車を止め揺れが収まるのを待ちました。運転できるくらいの揺れになったので、家に向かいました。途中、道路が陥没していて、車が落ちていたり、液状化していたりして、何度も方向を変え家にたどり着きました。家では地震が落ち着くまで外回りを片付け、ようやく入ると家の中はいろいろな物が倒れていて、足の踏み場もありませんでした。落ち着いてライフラインを確認すると、みな止まっていました。

13日、避難するよう告げる広野町からの防災無線に気づきました。姉弟からもすぐ来るようにメールが入りましたが、どこに逃げて同じと15日まで広野町にいました。どこのガソリンスタンドも長い列ができていました。15日、最終的に避難することを決め、本宮市にいる弟に迎えにきてもらい、途中、二本松市に立ち寄り線量を測って、初めて除染を経験しました。

本宮市には2か月ほどお世話になり、ガソリン券をいただいたりして週1回は広野町に通いました。震災後初めて広野町に車を取りに帰ったとき、玄関に猫が死んでいたのには大変ショックを受けました。埋めてやることもできず車庫に置いてきました。近所の人たちや友達の情報で家が荒らされることを知り、町に住む所をお願いしていましたがなかなか決まらず、友達の世話でいわき市にアパートを借りて週3回は家に帰り、家の片づけをしました。

その年の12月には広野町へ帰還しました。当初は町の人が少ない、除染の見知らぬ人をたくさん見かけるので、何となく夜は怖く電気を明るくつけることはできませんでした。生活において車を持たない高齢者は、町の中での生活は難しく感じました。

国道6号線の交通量の増加も普通じゃなく、朝晩の時間帯を考えて行動しないと生活していけないということも学びました。

今回の地震と津波については自然災害なので、それだけならもっと早く私たちは立ち直り、元の生活を取り戻すことができたと思います。しかし、目に見えず、人間の手で止めることのできない原発には、ノーと声を上げていきたいと思っています。





# 肉眼で海の底が見えた

さかもと よしひろ  
坂本 吉廣 さん  
(自宅で被災)

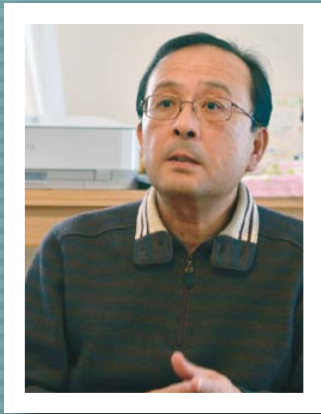
平成23年3月11日は、たまたま妻が横浜市の孫のところに出かけていて、自宅でテレビを見ていた時に最初の地震がありました。大きなテレビはこたつ布団をかけて守りましたが、サイドボードにあった高級なウイスキーの瓶が飛び出して割れてしまいました。海の方が気になって国道沿いに浅見川へ行くと、肉眼で150メートルくらい先に海底が見えたのです。しけて跳ね返ってくると思ったら、大きな邸宅が地区ごと津波をかぶって見えなくなってしまいました。

坊田橋にある工業水道の揚水事務所が揚がってきて、浅見川伝いに流れてきて接近してきました。近くにある大谷内の堰<sup>せき</sup>まで行ったら、2メートルくらいある堰の残り30センチメートルくらいまで水が揚がってきて、もし超えたら自分の地区も浸水するところでした。翌日また海を見にいったら、航空母艦が来ていて甲板に戦闘機が並んでいました。上空を無人機が

飛んでいました。消防団が警戒線を張りはじめていて、途中で止められました。

私はその日の防災無線に気づかず、夕方家にいたら、避難しない人の家を回る役場の車が来ました。すぐ逃げるように言われ、周りを見渡すと誰もいません。財布だけ持って移動すると、町のバスが4台と自家用車が何台か集まっていた。最初はいわき市好間の体育館を目指しましたが、避難所が人でいっぱいだったため平田村の体育館まで行くことになりました。平田村へは午後10時ころ着きましたが、そこもいっぱいでした。石川町の町民体育館へ行き、翌日の午前零時すぎに着きました。石川町では、本当によくしてもらい、食べ物は余るくらい用意してもらいました。

教訓としては、津波が来たときは、ポツンとした高台でなく、連携した高台に逃げるべきです。孤立すると救援物資も届きませんから。



## 夢を持ち続けてと、 子どもたちに伝えたい

さん べい まさる  
三瓶 雅 さん

(広野小学校長(平成23年8月~平成25年3月))

私が広野小学校長に異動したのは、広野小学校がいわき市立中央台南小学校を間借りして再開した、平成23年8月です。授業は空き教室でできましたが、職員室がなくて困り、プレハブを建ててもらいました。学習発表会は広野小学校だけでやりましたが、運動会は中央台南小学校と合同で行い、子どもたちにとってもいい思い出が残ったと思います。いわき市で再開した直後は、慣れない道を徒歩で通う子とスクールバスで通う子がおり、安全確保に神経を使いました。両校の児童はすぐとけ込み、子どもの適応能力の高さに感心しました。

平成24年度の2学期から広野町の元の校舎に学校を戻したときも、子どもたちは特に抵抗感はなかったと思います。保護者説明会をして、元の校舎に戻る子と中央台

南小学校に残る子に分かれました。さらに元の校舎に戻る子も、広野町に戻って通う子と、いわき市から通う子に分かれましたので、長い時間スクールバスで通う子どもたちが安全に学校に来られるか、それだけを心配しました。学校給食も再開し、約70人の児童全員と一緒にランチルームで話をしながら食べられたのは大変よかったです。全校児童が300人を超えていた震災前ではかなわなかったことです。

私自身、帰還困難区域に家があり、広野小学校で36年間の教員生活を締めくくったあとも、避難した中通りに住むことになり、震災が生き方までも変えてしまいました。広野町の子どもたちには、夢を持って勉強してほしいと声をかけてあげたいです。諦めたり、努力をやめたりしてほしくない、そう願っています。



## 生涯の出会いに感謝

しが としこ  
志賀 俊子 さん  
(児童館前から避難)

東日本大震災直後は親せきの家などに避難しましたが、長くは身を寄せられないと思いインターネットで避難先を探しました。

高齢の父のためエレベーター付きの物件を探していると、島根県の松江市に住みやすそうな条件の部屋が運よく1室だけ空いており、遠方でしたが思い切って行ってみました。

島根に着いたその日には、布団、家電、調理道具、食器など生活に必要なものがそろえられていました。松江の皆さんの人柄を一言で表すと「ほどよい親切」です。震災に遭った私たち家族のことを厄介者扱いするわけでもなく、哀れむわけでもなく、ごく自然に受け入れてくれました。“ほどよい親切さ”が、当時の私たち家族に

はとてもありがたかったのを覚えています。

松江には2年間住みました。

ある日松江城の近くを散歩していた時、たまたま私が30年以上趣味にしている刺しゅうの先生と出会いました。先生と出会ってからは1日おきに先生の教室へ通い、時を忘れて刺しゅうに没頭し、先生と作品展も開きました。

平成25年3月、広野町へ戻ってきました。現在は町の公民館で友人と共に手芸教室を開き、先生に教えていただいた刺しゅうを教えています。

町に戻ってからもその先生とは連絡を取り合っています。きっかけは震災でしたが、貴重な出会いを得られたことに今は心から感謝しています。



## 町に元の賑わいを

すずき 鈴木 すみさん

(広野町復興プロジェクト実行委員長(平成24年7月~))

私は、東日本大震災前から居酒屋を開いていました。その店を平成23年8月に営業再開し、避難先のいわき市から通いました。まだ、広野町の緊急時避難準備区域が解除される前でしたが、帰町した人には娯楽も必要だと考えたからです。

再開して困ったのは、当時帰町していた町民は300人くらいしかいないこともあって、町のタクシーが最初動いていなかったことです。タクシーが営業を再開してからも、最初は午後8時までの営業でした。町には代行運転もないので、お客さんが来店する手段がなく、私が送迎をすることにしました。現在も送迎をしながら居酒屋をやっています。

なんとか町を元気にしたくて、平成24年6月に町民有志の会「広野町がんばっ会」を立ち上げ、主に子どもたちのためにボランティア活動を始めました。その翌月には、町民有志と若手の町職員で構成する「広野町復興プロジェクト実行委員会」の委員長も引き受け、町の復興イベント

などに協力しています。私も住民の代表として、広野町の復興についてのいろいろな意見を町に提案していますが、すぐに形になって見えるわけではありません。でも、少しずつ復興に向かっていくという実感があります。

私は、平成24年8月に子どもを連れて広野町に帰町しましたが、町に戻っているからこそできることもあると考えています。

広野町には、原発の収束に向けて頑張っている作業員の人たちがたくさん民宿や宿舎に泊まっていますが、まずは広野町の住民が帰ってきて、広野町をもっと賑やかにして元の広野町に戻れるようになってほしいなと思います。町が完全に復旧・復興するには時間がかかると思いますが、地道に頑張っていることを皆さんに知ってほしいと強く思います。

私は、生まれ育った広野町が大好きです。子どもたちにも「自分の古里は広野町だ」と誇れるような町づくりに関わっていきたいと思います。





# ただ患者さんを守りたかった

たかの みお  
高野 己保 さん

(医療法人社団養高会 高野病院 事務長)

平成23年3月12日、最初の大きな地震の翌日、ラジオで原発事故のことを知りました。しかし、院長が「病院はコンクリート造りで、3月は南から強い風が吹いているから大丈夫」と判断し、避難せずに患者さんを守ることにしました。到底避難に耐えられない重症者もいたからです。

人と物があれば治療は続けられますが、スタッフの一部が家族と避難し、隣接のいわき市への物流が止まりました。

スタッフは、100人の患者さんに対して10数人で、疲労はピークに達していました。それでも医療の質を落とさないために、まず精神科の患者さんを、次に動かせる内科の患者さんを県外の医療機関へ移送し、

残った重症者の治療に全資源を集中しました。

残ったスタッフなら患者さんは守れると信じていましたから、どうしたらスタッフを守れるかを考え、微弱な電波を頼りに東京の病院へ「スタッフを守ってほしい」とメールを送りました。一度避難したスタッフが戻ってくるという大きな支えもあり、治療を続けることができました。

今だからこそ、無理な避難で重症者の命を危険にさらさずに済んだと言われていますが、待ったなしの決断であり、避難するのとどちらが正しい判断だったかは分かりません。ただ、すべては「患者さんを守りたい」という一念でした。



## 今日我慢すれば、 明日はいいことがある

たむら こういち  
田村 弘一 さん  
(林業(震災当時))

東日本大震災までは林業を営んでいて、平成23年3月11日はいわき市久之浜町末続の作業場で何人かを仕事させていました。

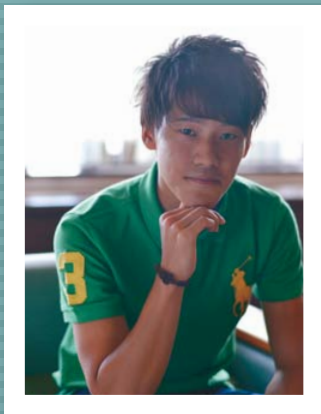
建屋がものすごく揺れ危険だったので、全員を安全な場所に避難させました。停電して仕事にならないので、火の元を確認してから従業員を車で送り届けて帰宅しました。携帯電話はつながりませんでした。

私は広野町消防団の分団長で、大津波警報の防災無線で集まってきた分団員から、近所の人海沿いの住宅で1人残されていると聞いたので、若い団員を連れて向かいました。すれ違った役場の広報車から第2波が来ると言われましたが、迷うことなく向かい、2階に取り残された2人をおぶって連れ出しました。ほかにもびしょ濡れになった5、6人を見つけ、消防車で公民館へ避難させました。翌12日は、海の方へ行かないよう、バリケードを張って警備し、2班に分かれて3人くらい

た行方不明者の搜索をしました。正午ころ、そのうちの1人が墓につかまって亡くなっているのを発見しました。

夕方、災害対策本部で原発事故のことを聞き、消防団長からは残ることを強制しないので分団ごとに話し合っていると告げられました。私の分団はみな若く、自分以外は全員避難させました。数台の消防車で手分けして、夜1軒1軒回って避難を確認しました。13日の夕方までに7、8割移動し、14日の朝方には町の職員を含め小野町に避難しました。

林業は、仕入先の山が警戒区域に入っていたので、取引先から断られ、未だ再開することはできません。現在は、応急仮設住宅の管理人をしています。しかし、自営業だったのでこれまでも浮き沈みはありました。後世に伝えたいのは、今日我慢すれば明日は何かいいことがあるんじゃないかと自分に言い聞かせること。家族の中にそう思う人が1人でもいれば、踏ん張れます。



## そろいのユニホームでつなぐ 故郷への思い

たむら しょうご  
田村 章悟 さん  
(広野中学校2年生(当時))

私は、東日本大震災が発生したとき、広野中学校の2年生でした。平成23年3月11日は、3年生の卒業式が終わり自分の家で横になっているときに、地震が起きました。小さな揺れが時間とともに大きくなり、お皿とか時計とか全て落ちて割れ、驚いて外に逃げ出しました。初めての経験で、独りのときだったので、どうしていいか分かりませんでした。部活動はバドミントン部に所属していました。しかし、震災で自分の学校に通うことができなくなって、チームもバラバラになってしまい、転校した先で練習には参加させてもらいましたが、違和感がありました。

結局3年生の大会は、残念な結果に終わってしまい、悔いが残りました。だから、高校に進学したとき、中学時代の悔しい思いをはらせるよう活躍しようと、迷わずバドミントン部に入部しました。

広野町出身のバドミントン部員は、自分たちの代になったら、そろいのユニホーム

を作るのが、先輩から引き継がれた伝統です。

進学した高校はいわき市内の4校に別れていますが、先輩に倣ってそろいのユニホームを作るため、みんなで話し合うために集まったとき、震災以来久しぶりに顔を合わす友だちもいて、うれしかったです。

背中に「東北に春を告げる町 広野」という文字が入ったユニホームが出来上がってきて、袖を通したとき仲間との一体感を感じ、士気が高まりました。3年生での県総体では、地区大会でダブルスが3位、シングルスがベスト16という成績を収め、県大会に出場することができました。

震災が起こる前は、将来スポーツに関わる仕事に就きたいと思っていましたが、震災後、復興の仕事がとてもやりがいのある仕事に思えてきたので、地方公務員を目指して、行政学などを学べる学部への進学を希望しています。



## 一日も早くすべての町民が 広野町で暮らせるように

ど い はる み  
土井 治美 さん

(岐阜市派遣職員(平成24年4月~25年3月))

私は、平成23年度末をもって岐阜市役所を定年退職となりましたが、その直前に全国市長会のホームページで被災地の多くの自治体においては、人材不足のため復興事業が思うように進まないことを知りました。現職のときは、被災地の応援をしたくても自由にならない状況にありましたが、退職後、再任用という身分で被災地へ派遣してもらえれば、腰を据えて仕事ができると考えました。

そこで、平成24年3月10日に、事務職の応援職員を求めている広野町を日帰りで訪れ、町の担当職員から話を伺うとともに、町内を案内していただきました。広野町は、その10日前の3月1日に役場機能をいわき市から本来の庁舎に戻したばかりで、庁内は雑然としていましたが、その中で土曜日にもかかわらず多くの職員が出勤して仕事をしておられたことを、鮮明に覚えています。

広野町在任中に、町民の皆さんが帰還しようと思えるには「医・食・住」の不安を解消することが重要だと感じていました。

私が離任してからの2年間でこれらに対する町の環境が改善されたことをニュースなどで知るたびに、一人でも多くの方が町内に移り住んでもらえるものと思っています。

私は、広野町の小中学校で学ぶ子どもた

ちの姿を幾度か見せていただきましたが、最も印象に残っているのは、広野中学校の平成24年度震災復興祈念集会での生徒会長さんの次の言葉です。「私は、この広野中学校からできることを精いっぱいしていきたいと思います。みんなで協力すれば、広野町の復興も一段と早く進むことでしょう。」。このように考えている子どもたちがいる限り、広野町のより早い復興は間違いないと確信したものです。

現に、私が着任した平成24年4月には、本格的な除染が始まったばかりで、町への帰還者は、300人にも満たない状況でしたが、今では2000人近くまで増えているようです。これから、町の様子は復興事業で大きく変わっていくと思いますが、そこで暮らす町民の皆さんの絆が震災前のように強く結ばれていれば、以前にも増して住みやすい、また、活気のある広野町となることと思います。

震災から4年が経過し、風化という言葉が聞かれますが、私も微力ではありますが、福島現状を少しでも多くの人に知ってもらえるよう、岐阜で努力していこうと思っています。一日でも早く、すべての町民の方が、広野町で暮らす日が来ることをお祈りします。





## 津波のすごさを目撃した

にい つま つね たか  
新妻 常敬 さん  
(自宅で被災)

平成23年3月11日は、午前中広野町体協グランドゴルフ部会の総会が開催され、帰り道にガソリンを満タンにして帰宅しました。遅い昼食を取り、妻とテレビを観ているときに地震が来て、横揺れが長くて家の中には怖くていられなかったので、家の外に出て木につかまっていた。揺れが収まり家の中に入ったら、家の中は食器、額、人形などがすべて落ちて、物をどけなければ歩くこともできませんでした。2階は子ども部屋で、書類、テレビなど全て散乱し、どうしようもありません。

自宅のある高台には、津波が来るということで久保本町地区の人が上がってきました。

第1波は、浅見川河口にある工事中の浜街道を乗り越えて巻き上がる感じで、真っ黒な波がグーッと押し寄せてきたのが眼下に見えました。まず軽トラック数台がお寺の裏側の農地の低い方に流れてきて、続いて家屋の屋組が瓦を載せたまま流れてきました。また、津波で壊された住宅すべてが押し寄せてきたのです。沖を見たら何メートルか非常に高い真っ白い帯状の波が押し寄せてくる様は言葉にならない様子でした。その後ろにも一直線に波が押し寄せてきていました。自宅の上にある旅館「日の出別館」の2階に上がって、波が引くのをじっと見ていましたが、引き波の強さはすごいものでした。

引き波と共に人がどんどん上がってきて、体育館や公民館に避難していました。自宅は停電しませんでした。街中は停電で暗く気持ちの悪い一夜となりました。余震が怖くて車に座布団、毛布、湯たんぽを持って行って寝ました。水道は止まりました。

翌12日の午後、町の防災無線で南西の方向に逃げるよう放送がありました。2、3日で帰ってこられるだろうと思い、下着1枚くらいを持っていわき市好間のいこの家に行きました。そこでテレビから原発事故などの情報を得て、必要なものを取りに一度自宅に戻りました。同月16日に息子のいる福島市に避難しましたが、二本松市にいた友人からパークゴルフに誘われ、気分転換ができました。翌月4月の23日に二次避難所である東白川郡塙町のゆうゆうランドに移り、そこではグランドゴルフ、お風呂、散歩などで気分転換をしていました。最後にいわき市常磐迎の応急仮設住宅に移りました。

自宅の庭には1万球のサギソウを栽培していましたが、避難で全滅しました。大熊町にある先祖の墓参りができないこと、妻が集団生活になじめなかったことなど、避難生活はつらいものがありますが、いわき市の人にはお世話になっております。一日も早くわが家に帰りたいたいとの思いで過ごしておりますが、いつの日になるのでしょうか、自分でも分からない現況です。



# 一刻も早く町を元に戻したい

にしもと のぶ お  
西本 信雄 さん  
(広野町建設業組合 組合長)

平成23年3月12日、前日の地震に伴う復旧作業をしていた時に福島第一原発事故が発生し、避難を余儀なくされました。その後は報道で流れる情報を聞きながら町へ戻る時期を考えていましたが、避難後3週間も過ぎようとしていたところ、避難先の町役場から連絡があり、「広野町の被害状況を調査するために主要な場所・道路などのがれき類を撤去してほしい」と依頼を受けました。そのため、避難中の各組合員に連絡し、作業員の確保、資機材の確保をお願いしました。当社でも、避難中の従業員と何とか連絡を取り、「広野町の復旧作業をするので、戻って仕事をしてほしい」とお願いをしました。

そのころの町内では、水道は復旧しておらず、一部電気もなく、また従業員の中には警戒区域のため自宅に入れず、臨時の住

居を用意しなければなりませんでした。何とかいわき市四倉町に社員が寝泊まりできる場所を見つけ、従業員を確保し作業を開始したのです。

復旧作業の4月は、がれき撤去、道路や下水道の調査などを行い、現況を把握し、各組合員とも連絡を取り合い、広野町の被災状況を改めて振り返り、震災の凄まじさを感じました。5月からは、本格的にがれき撤去、倒壊家屋の片付け、道路などインフラの復旧に取り掛かることができたのです。

4年近く経過した今、町は以前の様子を取り戻しつつありますが、引き続き帰還のための復興作業が継続していますので、これからも組合員と共に協力し、復興を加速し、双葉郡復興の最先端として頑張りたいと考えています。



## まさか広野町に 津波が来るとは思わなかった

ねもと くに えい  
根本 邦衛 さん  
(自宅で被災)

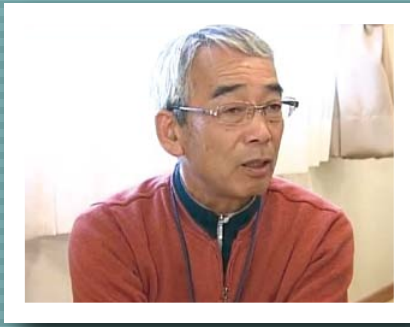
平成23年3月11日午後、私の記憶にない最初の大地震が発生しました。町内に住む妻の母が町内の診療所に通院していましたので、迎えにいてみると玄関のガラス戸はめちゃくちゃに壊れ、無人となっていました。義母は知人の車で送ってもらい無事帰っていたのですが、私は町の高台に避難したかとも思い、高台にある公民館、総合グラウンドなどへ探しに行ったその時です。高台から見える海岸線に向かって想像もできない大津波が押し寄せてくるのが見えました。多分、津波の第2波、第3波だったと思います。

私が怖いもの見たさにJR常磐線桜田こ道橋をくぐり抜けて見た光景は、常磐線と海岸の間にあった広い田畑や家屋敷は完全に海に化けており、自然の凄まじさと恐ろしさを感じました。広野町に70年以上住んできたなかで、まさかわが町にこのような大津波が来襲するとは、考えたこともありませんでした。わが家は特段の被害もなく、電気、上下水道とも無事でしたが、翌12日に町の防災行政無線で南西の方向に逃げるよう放送があり、家族はその日いわき市の親せき宅へ避難しました。

それは福島第一原発事故による放射線の影響があるかもしれないからだということ、後に知りました。

翌15日、娘と孫は横浜市へ避難しましたが、私は小野町の避難所へ行こうと思い、その日もいわき市に残りました。しかし、車の燃料がカラカラで身動きが取れませんでした。そのような状況の中、翌16日の未明、息子の大学時代の同級生が千葉市から60リットルのガソリンを持ってきてくれ、無事小野町へ避難することができました。避難所は小野町の体育館で、既に多くの町民が避難していました。体育館での生活は、夜から朝にかけてストーブの火を消さねばならず、大変寒かったです。食事はパン食、スープ、カップ麺が多く、中には賞味期限切れのものもありました。一時感染症も発生しました。そのようななか、その月の20日、小野町の配慮により町の第3セクターの施設で久しぶりの風呂に入れたときは、本当にありがたかったです。

翌月4月9日に二次避難所である石川町母畑温泉の八幡屋に移りました。石川町での生活では地元の皆さんと会話をしたり、お茶をごちそうになったりと感謝しています。その年の8月28日にいわき市常磐迎第一応急仮設住宅に移りました。いわき市の生活では、車にペンキを塗られるトラブルなど残念なこともありましたが、いわき市の皆さんには石川町の皆さん同様、お世話になっているという気持ちでいっぱいです。



## 一番悔しいのは、 元の生活を取り戻せないこと

ねもと まさひと  
根本 賢仁 さん  
(自宅近くで被災)

大地震のあと自宅を確認すると、ぐし瓦(棟瓦)が落ちていました。余震が続いていたので、家の中にいない方がいいと判断し、財布と車のキーだけ取りに入り、避難場所の下浅見川集会所に車を移しました。

ワンセグで宮城県の津波第1波の映像を観ました。そののち「津波が来ます、大津波が来ます」という防災無線が流れました。

孫を迎えに保育所へ向かおうとしたところ、海岸線に津波がぶち当たって10メートルくらいの波しぶきがびょうぶのように立ちました。

すぐに海岸の近くを離れるべきだと思い、高台の方へ逃げると、町の人たちも大勢逃げてきました。築地ヶ丘体育館(広野中学校体育館)のところまで上がると、海の方を見ている人がたくさんいたので、私も車を止めて海の方を見ました。すると私の家の前の久保地区の住宅が、津波の引き潮で流されていきました。自宅は平屋で、津波で浸水しましたが、建物は全部残っ

ていました。その晩は、町内の旅館に部屋を借りました。

地震の1か月くらい後、地元・久保本町地区にある鹿島神社の津波被害状況を確認し、浜下り神事に関わるものをすべて集めました。文化財を残す手立てを考えましたが、宗教法人に関わることなので国や自治体の財政支援が得られず、地区で神事を行うため集めてあったお金で応急措置をしました。津波で流された鳥居についても、今後は個人の家で葬儀はしないだろうということで、地区の葬儀組合のお金で工面しました。

この地区には、昔使っていたいろいろな道具などが残っていましたが、全・半壊建物の取り壊しでなくなってしまい、蔵の中には明治初めころの教科書などもありましたが、全部捨てました。文化的なものは、今回の津波被災で全部葬られたと感じています。

何と言っても一番悔しいことは、元の生活を取り戻せないことの一点に尽きます。





## 妻の誕生日に ろうそくの明かりで食事

ねもと まもる  
根本 衛さん  
(広野町内で被災)

震災当日は休日、娯楽施設でリフレッシュしていました。地震発生時店内では数人が遊技を楽しんでいて、揺れと同時に外へ駆け出しましたが、私は室内の方が安全だと考え店内にとどまりました。揺れが収まり外に出たところ、駐車場は地盤が沈下していました。これは大変だと思って車で家に帰ろうとしましたが、6号国道は北迫川付近で地盤沈下を起こしており車が渋滞、全然動く気配はありません。旧6号線を通って家路につきましたが、道路沿いのブロックは傾斜または崩れ落ちている状態であり、揺れの大きさに驚愕しました。家に帰ると妻が棚から落ちた食器などの片付けをしており、私がおの手伝いをしている中でも余震は続き、寒い中でも出入り口を開放し、いつでも外に出られる態勢で一夜を過ごしました。

私は、いわき市小名浜にある娘宅に避難しました（一時的に茨城県にある妻の実家にいたこともあります）。幾度か余震はありましたが、ひと月は大した揺れもありませんでした。

4月11日は妻の誕生日のため、夕方5人で外出に出向き2階に通され雑談していたところ、突然大きな揺れに襲われました。急いで階段を降りると、店員から津波の恐れがあるので営業を中止すると言われました。やむなく店を出たところ、町の電気

は消え、車が渋滞して通常5分程度で着く娘宅に帰るのに、1時間を要しました。近くのコンビニで弁当を買うつもりでしたが、ろうそくをつけて営業している店でも食品はほとんど売り切れていて、残り物を買ってろうそくの明かりの中で誕生日を祝いました。孫たちはクリスマスのようなだと笑っていましたが、このような日は二度と来ないよう願いたいものです。

7月9日にいわき市中央台高久第四応急仮設住宅に入居できました。応急仮設住宅には、連日各種団体や個人ボランティアの人たちが訪れ、生活物資の支援、心身のケアサービスをしていただき、感謝の気持ちでいっぱいでした。長い仮設住宅生活をしている中で、絆の意味を私なりに解釈すれば、1本の糸を互いに持ち合い、引いたり引かれたりしながら助け合うことなのかなと思います。原発事故や大震災によりおの心の疲労を持って生活しています。私たちは、原発事故の被害者であることは言うまでもありませんが、今町民一人ひとりが何をすべきなのか考え、国や自治体に頼るだけでなく、負の生活をゼロに、また正にする努力が必要だと思います。



## 震災直後、 町はゴーストタウンになった

ねもと やすのり  
根本 安知 さん  
(元警戒パトロール員)

平成23年3月11日は、妻と町内の根本医院へ行った時に最初の地震が発生しました。診療所に入るとすぐに携帯電話の緊急地震速報が鳴り、切るやいなや地震が来ました。すぐに表に出て車に乗りました。駐車場も建物もユサユサ揺れました。

翌12日の午後2時ごろ、できるだけ遠く、南か西の方に避難するよう防災無線が流れました。いわき三和インター方面を目指し、この日は福島空港まで行き駐車場で車中泊しました。認知症のある母は、事の成り行きが飲み込めず、帰ろうと言うばかりでした。空港では離発着する自衛隊のヘリコプターや空港のスピーカーから、利用者以外は駐車場を出るよう呼びかけがありましたが、無視しました。車のラジオで楡葉町や浪江町の避難情報を聞きましたが、広野町の情報は聞けませんでした。

そのあと、平田村の避難所で親せきと合流して15人になり、日立市の親せき紹介のアパートやいわき市内郷綴町に移り住んだ後、家族4人でいわき市の借り上げ住宅

に落ち着きました。その後、2度、3度を含む避難生活の中、母の病状が悪化し、同年7月に入院することになってしまいました。

双葉警察署の防犯指導隊を委嘱されていた関係で、広野町に泥棒が入っているという情報が入りました。同年5月に指導隊の仲間と協議して、町にボランティアを申し出ましたが、最初は町の消防団が消防車で巡回しました。同年7月10日に県の事業として認められ、3直交代制で行いました。

実際に回ってみて、まさにゴーストタウンだと思いました。最初は夜電気の点いている家がなく真っ暗で、だんだんあちこちで電気が点くようになりました。活動前は4か月で70件くらいの盗難があったため、他県ナンバーの不審車は必ず警察に連絡して照会してもらいました。活動を始めてからは被害が激減しました。私は平成25年1月で辞めましたが、現在も警戒パトロール隊の活動は続いています。



## 広野町に縁があった

はせがわ あきひろ  
長谷川 明弘 さん

(三郷市派遣職員(平成23年12月~25年3月))

私が広野町に赴任したのは平成23年12月で、当時は役場機能がいわき市の湯本支所にありました。原発事故の起きた年でしたが、父方の実家がいわき市にあり、浜通りの状況を知っていたので、赴任することについて抵抗感はありませんでした。広野町に「縁」があったのだと思います。

来てみて、まず職員数が少ないのに驚きました。行政の仕事は、人口が少なくてもやることは一緒なので、当時病気で倒れた職員も少なくなかったなかで、派遣職員の自分が広野町の元からいる職員よりも先に倒れてはいけないと思いました。

ただ、どれだけ健康管理に気をつけていても、狭い湯本支所では職員がほぼ同時期に風邪をひいてしまい、職員といえども生身の人間であることを自覚しました。

広野町では教育委員会事務局で学校施設の復旧業務などを担当しましたが、湯本支所から広野町の学校施設までは高速道路利用で40キロメートル離れており、現場に出るときは1日仕事でした。また、復旧工事は除染作業と並行して進める必要があり、調整に苦労しました。平成24年3月

に役場機能が広野町に戻ってからは、朝6時起きで湯本の宿舎から通いました。当初4か月間だった派遣期間は、平成25年3月まで1年間延長され、腰を据えて仕事をしました。

平成24年度の2学期から元の校舎で広野小学校と広野中学校を再開する目標を立てていましたが、目の前の仕事よりも国・県との折衝、予算編成・議決、契約という工程を組むのが一番大変でした。一つでも工程がずれたら2学期に間に合わないというギリギリの状況でしたが、ほかの部署や業者の皆さんの協力のおかげで、8月27日の始業式を迎えることができました。

個人的な感覚としてほぼ奇跡的だったと感じています。後日その記事を新聞で読んだとき、自分の役目の一つ果たせたと思い、感慨深いものがありました。

広野町は三郷市にとって災害時相互応援協定の相手であり、なくてはならない存在です。私は、三郷市に戻ってからも広野町のことをずっと気にかけていますし、今でも来てくれと言われたら、いつでも飛んでいきます。



## 避難指示はもっとはっきりと 伝えてほしかった

ふる いち つよし  
古市 強 さん  
(自宅で被災)

平成23年3月11日は、自宅でテレビを  
観ているときに地震が来たので、消して表  
に出ました。揺れがいったん収まった後、  
壊れた家の中を片付けました。海辺に住む  
親せきが家に来て津波が来たと教えてくれ  
ましたので、海岸に行ってみたら引き潮  
で流された後でした。停電していたので、  
ろうそくの明かりで夕食を取りました。

翌日12日の防災無線は聞いていません。

13日の午後になって「避難用のバスを  
出すので、町の児童館へ集合してくださ  
い」という防災無線が聞こえました。行き  
先は、南の方とか西の方とか言っていたよ  
うな気がします。私は避難を強制されて  
いないと受け取り、バスには乗りませ  
んでした。ただ、自宅は電気や水が止ま  
っていたため、その夜は町内の折木にあ  
る親せきの家に泊まりました。その家の  
家族は、広野町から避難していました。

翌日の14日はいわき市の親類宅に身を

寄せ、16日に娘がいる新潟県柏崎市へ自  
分で車を運転していきました。ガソリンが  
ないと、ノーマルタイヤだったので困り  
ました。高速道路は断念して一般道で行き、  
給油は柏崎市の人に会津坂下町までガソリ  
ンを持ってきてもらいました。

娘のところといえども長居はできないと  
実感したので、その年の9月に水道が再開  
したのを機に、広野町に戻りました。妻は  
避難生活で体重が10キログラムも減りま  
した。

今思えば、町からの避難指示をもっとき  
ちんとしてほしかったと、憤りを感じてい  
ます。周りの人にも、はっきりと伝わらな  
かったと言う人がいます。町の執行部と町  
議会は、国、福島県および東京電力株式会  
社からの情報はどう入って、町は町民へど  
う伝えたのか具体的に検証し、今後の防災  
に生かすよう提案します。





## 石川町では職員5人で 400人の町民に対応

みずの しゅういち  
水野 秀一 さん  
(広野町職員(当時))

東日本大震災が発生した当時は広野町の職員で、最初の地震があった平成23年3月11日も執務中でしたが、役場庁舎の破損は、天井や壁など何か所かにとどまりました。いったん自宅に帰り家族の無事は確認しましたが、町の災害対策本部ができたのですぐ役場に呼び戻されました。その日は役場に寝泊まりして待機し、翌12日の夕方に福島第一原発が爆発したから石川町へ避難するよう指示があり、避難者の誘導とお世話をするため、大型バスと一緒に石川町総合体育館に向かいました。

着いたのは夜でしたが、石川町の副町長が出迎えてくれ、翌日から石川町の人々が炊き出しをしてくれました。体育館には、マイカーで避難してきた人もいて最高で400人くらいいました。それに対して町職員は5人で、とても対応不可能です。石川町の町長、副町長に手を貸してほしいとお願いしたら、石川町の職員で5、6人の班を作って寝泊まりしてくれました。

3月27日に水戸の長姉が亡くなり、服がないので作業服で水戸へ行きました。埼

玉の次姉の意向で、認知症の母は埼玉県の三郷市に避難しましたが、症状が進行しました。町は4月18日にいわき市湯本にある会社の事務所を借りて支所を開くことになったので、私は、4月16日に石川町を出て18日からは湯本の旅館から通いました。5月23日に母がいわき市のスパリゾートハワイアンズに移り、私も合流しましたが、8月にスパリゾートハワイアンズを出ることになりました。病院や介護施設など母の行き場所を探しましたが、空いているところは高額で、やむを得ず8月末日で早期退職して広野の自宅で在宅介護を始めました。

介護施設のデイサービスやショートステイを頼んだら、広野町は放射線量が高いのでこちらで送迎するように言われました。でも私が送迎すると90歳近い母がどこかに連れていかれると泣くので、再度施設に依頼して送迎してもらうようにしました。

いわき市の介護施設が平成24年6月に母を特別入所させてくれるまで、母の介護は1年4か月に及びました。





## 復興の足かせにならないよう、 全力で水道の復旧をした

み はし ひろし  
三橋 博 さん

(双葉地方水道企業団 総務課長補佐(当時))

平成23年3月11日は、楢葉町にある管理本館で被災しました。進入路などは崩壊しましたが、阪神淡路大震災後に建てた管理本館は建物自体には被害がなく、ロビーに災害対策本部を設置し、被災状況の確認を指示しました。広野町の被害状況については、広野工業団地や海側で数か所水が吹き出しているところが目視できたので、バルブ操作で止水しました。翌12日、楢葉町も国からの避難指示が出たため、広野町の小滝平浄水場に災害対策本部を移し、給水車2台を使って広野町内で給水活動をしましたが、午後3時に広野町役場から避難指示があり、いわき市へ避難しました。広野町から残っている町民のために、役場職員による小滝平浄水場の運転を認めてほしいと依頼があり、許可するとともに企業団の職員も数人残しました。

広野工業団地内の製薬会社から、「水がないと原材料が化学反応するおそれがあるので、給水してほしい」との依頼を受け、4月10日に小滝平浄水場からの上水道を

工業用水と兼ねて復旧させました。また、内閣府から東京電力(株)広野火力発電所への通水を依頼され、工業用水を3日間で小山浄水場からヴィラ岩沢付近の6号国道まで復旧、数日後には東京電力(株)広野火力発電所への通水を確認しました。広野町は屋内退避指示から緊急時避難準備区域に指定されましたが、水道復旧の遅れが原因で復興の足かせになってはいけないと思い、企業長と広野町長から許可をもらい積極的に水道復旧作業を進めました。6月ころには浄化槽を使用されている区域内には通水できましたが、下水浄化センターが津波被害の影響もあり、公共下水道の区域には通水しませんでした。また、自衛隊、復旧工事業者さんの求めに応じ、消火栓から給水できる施設を設置しました。

現在、広野町に給水している水道水は、毎日放射性物質の測定をしていますが、全て検出限界値(1Bq/ℓ)未満です。水道水の安全性は確保されていますので、広野町の皆さまにはどうぞ安心して飲んでいただきたいと思います。



## 消防団で避難中の町を パトロールした

や ない みつ まさ  
矢内 光正 さん  
(広野町消防団副団長(当時))

最初の地震が来た時、かなり強く長い揺れで、松の枝が横ではなく縦に揺れました。

このままどうなってしまうのか、恐怖そのものでした。道路が地割れしたことを知らされ、すぐテレビをつけてみて、とんでもないことになると思い、役場に連絡を取ろうとしても電話が通じませんでした。

当時の消防団長にも連絡が取れなかったので、すぐ消防団の作業服に着替えて役場に行きました。町長室から海岸をみたところ、2波目の津波が防波堤に打ち当たって、松林を超えてきて、とにかく言葉にはならない状況でした。道路が寸断されたということもあり、かなりざわめいていました。町長や消防団長と相談して、まず避難してくる人の受け入れ態勢を整えようと、役場周辺の公共施設に避難させることになりました。どこに行ったらいいのか分からない人が多く、夕方からは町のマイクロバスを出して、避難所に移送しました。

広野町では、津波で3人が行方不明になりましたが、翌12日と翌々日の13日に1人ずつ遺体が見つかりました。残りの1人

は、海岸線を中心に、消防団でかなり捜索したのですが、見つかりませんでした。

ご家族には気の毒でしたが、当時は避難した消防団員もいて、捜索に当たる団員の確保もなかなか容易ではありませんでした。

14日に町が役場ごと小野町に避難すると、消防団も行動を共にしました。小野町にお世話になって3、4日目に、広野町が全世帯避難しているすきに、空き巣が入ったと一報がありました。消防団長と相談して、消防団が昼夜1日交代で警戒に当たることにしました。各分団交代で、11月いっぱいまで続けました。空き巣は、1か月過ぎないうちに5、6件は報告が上がってきましたが、いくらかでもパトロールの効果はあったと思います。当時、夜警をしながら歩いたとき、避難しなかった地区に明かりがついていたことがありました。

多分家族全員ではないと思いますが、残りのほとんどの地区に明かりはついていませんでしたので、とても印象的でした。今でも遠方に避難したため、戻ってこられない消防団員もいます。



## 小野町の避難所から広野町へ 毎日通った

よしだ しげみつ  
吉田 重光 さん  
(水道・下水道管工事業者)

震災時のことは、私自身はあまり覚えていません。昔から双葉地方水道企業団の仕事を請け負っていたので、家に帰ってから、漏水箇所、断水させる場所を企業団と話し、止めるところは止め、足りないところはパックで配り、その作業を11日の午後から14日の午前中までしていました。ところが、14日に福島第一原発の3号機が水素爆発し、企業団そのものが避難しましたので、広野町役場に出向き、これからどうするのかを聞きました。ほかの家族はいわき市に避難しましたが、私と息子は11日から13日までは広野町に泊まり、広野町消防団の活動に参加していました。14日の昼から町ぐるみで小野町に避難することになり、作業用の車に乗っていきましたが、小野町の避難所はいっぱいだったのでその晩と15日は車中に泊まりました。ガソリンがないため暖房はかけられませんでした。

17日に東芝の災害対策本部が二ツ沼公園にできました。ライフラインが痛んでいるのでそこへ行ってほしいと依頼を受け、タイベックスーツとヘルメット、マスク、長靴で対策本部に行きましたが、鍵を持っ

ている人が避難していたため入れませんでした。窓ガラスを切り抜いて、とりあえず入りました。ボイラー室も鍵がかかっていましたが、漏水していたので扉を破り応急処置をしました。小野町の避難所に帰ったのが午後11時ごろでした。

18日に放射線量を確認しにいくことになり、私と設計屋さん1人と町の職員3人で広野町に入り、何十か所もの線量を測りました。線量が一番高かったのは広野町工業団地の近くのアスファルトで、1.3マイクロシーベルトから1.6マイクロシーベルトで、あとの場所は0.4マイクロシーベルトから0.7マイクロシーベルトだったと思います。道路状況を確認するため、毎日小野町から広野町に通いましたが、小野町に避難していた企業団の職員2人も合流して、漏水箇所などを調べるため毎日広野町に入りました。

広野火力発電所への配水も止まっていたのですが、止めておくと東京の夏場の電力需要に持ちこたえられないので、連休明けには再開したいと依頼を受け、通水を再開するために毎日通いました。



## 逆境に負けないことを信じて

よしだ たかみ  
吉田 隆見 さん  
(広野中学校長(震災当時))

東日本大震災の当時は、福島県内公立中学校の卒業式の日でした。その日の午後、不登校生徒のミニ卒業式を終えてまもなくの大震災でしたが、45人の部活動をしていた生徒を直ちに校庭中央に避難させました。東西の校舎の継ぎ目では亀裂が入り、コンクリート片が落ちるのも目にしました。気温は低く、鉛色の空に横殴りの雪、夕方を思わせる薄暗さは、この世の終わりではとの思いが脳裏をかすめました。

保護者と連絡を取りながら、最後の生徒を引き渡したのは午後10時半ころでした。

広野中体育館は避難所となっていましたので、時間がたつにつれJR職員に誘導されて電車の乗客なども避難してきましたが、停電で暖房が使えず、校庭向かいの電気の通っていた築地地区集会所へ、私の判断で移動するよう指示しました。

それ以降、4月1日に福島工業高等専門学校の見聴覚室に広野小・中の職員室機能を立ち上げるまでは、教職員は自宅待機になっていました。生徒たちの安否・居所確認に全力を尽くすよう指示しましたが、県外に避難した生徒とはなかなか連絡が取れず、最後の1人を確認するのに2、3か月を要しました。

10月3日にいわき市立湯本第二中学校を間借りして、全校生徒20人で広野中の

再開を果たすことができ、避難生活を強いられている今、「苦しい時こそ助けあい、支えあう気持ちが大切であること」を折に触れ強調してきました。再開後、これにつながることを目指して少人数である全校生が、さらに絆を深められる行事はないものかと模索していたところ、神奈川県の東日本大震災復興支援企画である「被災地の子どもたちに修学旅行を」のキャンペーンを町教育委員会から知らされ、迷わず手を挙げました。鎌倉市内の班別自主研修では、他学年の生徒とも仲良く会話したり、横浜中華街での豪華な中華料理に舌鼓を打ったりする姿を見て、実施して本当に良かったと思いました。

普段、空き教室をさらに間借りしての授業は、隣の教室の声も聞こえ、何かと不自由で窮屈な思いもあったと思います。でも、その逆境で過ごした思いや我慢は、生徒一人ひとりのその後の人生に、大きくプラスに作用するものと確信しています。

平成24年3月末の人事異動により、後ろ髪を引かれる思いで広野中を離れましたが、その年の2学期に広野中が本来の校舎に戻ったことを耳にしたときは、小躍りしたいくらいうれしい気持ちに満たされました。





## お年寄りは2、3日で ノイローゼになることも

よね やま まさ ひこ  
米山 正彦 さん  
(広野町内の友人宅で被災)

友人宅にいるときに最初の地震がありました。その晩は自宅を片付けて寝るつもりでしたが、1回目の余震後、消防車や防災無線がけたたましく、高台の総合グラウンドに避難しました。その後保健センターに誘導され、その晩を過ごしました。翌12日の午後3時ごろ、役場の職員が回ってきて、原発が危ないと言っていました。

そのうち、東京にいる娘から連絡があり、「東京では原発が爆発した映像が出ているよ、早く避難して」といわれ、表の駐車場を見たらほとんど車はありませんでした。それでも、保健センターにはお年寄りがかかりました。運転手と保健師に逃げようと言われ、町のマイクロバス、私の車、息子の車3台に皆で乗り合わせ、いったんいわき市の方に向かい、好間のグラウンドの駐車場で合流して平田村に行きました。でも、そこはいっぱい、石川町総合体育館へ行きました。着いたのが午後11時半ぐらいで、それまで何も食べない状態でしたが、石川町の人からおにぎりをふるまわれました。

2、3日したら妻の父が「お前に家を作る。俺は友人の旅館に一生世話になる」などと変なことを言いだしました。おかしいので、15日に医師に診せました。しかし、医師からもらった薬には興奮剤が入っていたようです。16日になったら夜徘徊するようになり、17日に別の医師に診せたら、

この薬を飲ませてはいけないと言われ鎮静剤を飲ませました。その日の昼過ぎ、風呂に入りたいと言うので連れていったら、入浴後「俺、誰かに裸をカメラで撮られている」と言うのです。医者診断では、ストレス症候群ということでしたので、町の保健師にその類いの病院が福島県内にないか調べてもらいましたが、いっぱいでした。

やむなく東京にいる妻の弟に、ワンボックスの車で来てくれと頼みました。息子の友達からの情報で常磐自動車道が通れることを知り、常磐道で東京に向かいました。高速道路走行中幾度となくドアを開けようとしたので、弟が父親の前に座り行動を止めながら移動しました。それでワンボックスカーが必要だったのです。深夜やっている病院はなくまず松戸病院に行き、次に市川市の精神科のある病院に行かせました。診察の結果、即日入院になりましたが、次の日、本人はけろっとして「喉が渴いたからビールでも飲もう」などと言っていました。脱水症状を含めたノイローゼだったようで、2週間くらい入院しました。

退院後、再発防止のため借り上げ住宅を探しましたが、なかなか見つからず困っていたところ、知人が紹介してくれたアパートに落ち着くことができました。そこに父親を引き取り同居生活をしていましたが、平成26年9月4日に他界しました。





# 震災が 母の寿命を縮めたかもしれない

わた なべ りゅう こ  
渡邊 龍子 さん  
(平田村に一次避難)

平成23年3月11日はいわき市久之浜町を走行中に被災し、自宅に戻ると屋根瓦は落ち、玄関は開かずにコンクリートは地割れして、電気も水も止まりました。余震も続いていて高齢の母もいましたので、その日と次の日の夜は町内の小滝平にある親せきの家に泊まりましたが、家族は女性と子どもだけでした。男性はみんな消防団員として招集されて、弟はそのまま何か月も帰れませんでした。2日目の12日に消防団に入っているおいから原発事故のことを知らされ、翌13日に消防団長をしていた弟からも電話で広野町から離れるように言われ、おいの指示で避難を開始しました。

近所の人と一緒に避難するように指示され、親せきや近所の人たちも合流して車10台くらいになりました。最初はいわき市好間の工業団地を目指しましたが、そこも危ないと言われ国道49号線で会津まで行くことにしました。ノーマルタイヤの車とガソリンの少ない車を放置して、スタッドレスタイヤでガソリンの多い車に乗り合わせました。平田村の道の駅で仮

眠を取ろうとしましたが、そこにたまたま村の職員が来て、避難所の平田村中央公民館に案内してくれ、みんなで泊まることができました。公民館は暖房が入り、村の人たちが温かい味噌汁やたくさんの布団、毛布、母のためにマットまで用意していただき、本当に助かりました。

母は妹家族が迎えにきて、いったん東京に行ってそこから小田原の妹のところに行きましたが、その年の6月に二次避難所のいわき市ゆったり館で合流し、8月に一緒にいわき市常磐迎第一応急仮設住宅に移りました。何をするのも高齢の母と一緒に不安でした。母は応急仮設住宅に移ってから約半年後に病気になり、平成24年の8月に亡くなりました。震災が母の寿命を縮めたかもしれない、もし原発事故がなかったら、母はまだ近所の人たちとお茶を飲んだり畑仕事をして、余生を楽しんでいられたのではないかと思うと、とても残念です。

原発事故の被災者はなかなか前が見えません。前に歩けと言われてもどこに足をつけたらいいのか分からず、あたかもフワフワした綿の上を歩いているような心境です。



## IV

# 資料

- 1 義援金など
- 2 人的支援
- 3 物的支援
- 4 三郷市
- 5 伊東市

# 1 義援金など

国、福島県から配分された義援金および広野町への義援金など

(平成26年3月31日時点 件数は延べ件数)

国から配分された義援金	25億3110万5280円
福島県から配分された義援金	3億6731万円
広野町に直接寄せられた義援金	1億9977万8039円 (2,183件)
合 計	30億9819万3319円
寄付金のうち子ども未来基金原資	498万1228円 (21件)

※「子ども未来基金」は、広野町の子どもたちのために役立ててほしいという意図で寄付された皆さんの意向に沿うように、用途を明確にした基金を積み立てるものです。



歌手のさだまさしさんと南こうせつさんが義援金を持参 (平成23年10月24日)

## 2 人的支援

広野町へ人的支援をした官公庁、企業など(平成26年3月31日までの延べ人数、順不同)

○政府 120人

内閣府 6人、復興庁 1人、財務省 9人、農林水産省 46人、経済産業省 58人

○広域自治体 25人

福島県 15人、東京都 4人、長野県 2人、大阪府 4人

○基礎自治体 136人

三郷市 5人(埼玉県)、千葉市 9人(千葉県)、港区 3人、新宿区 3人、墨田区 3人、江東区 12人、品川区 3人、目黒区 3人、大田区 3人、世田谷区 6人、渋谷区 3人、中野区 3人、杉並区 3人、北区 3人、荒川区 3人、板橋区 10人、練馬区 6人、足立区 12人、葛飾区 7人、江戸川区 3人(以上、東京都)、岐阜市 3人(岐阜県)、静岡市 4人、伊東市 2人(以上、静岡県)、一宮市 1人、愛西市 1人、清須市 2人(以上、愛知県)、京都市 3人(京都府)、高槻市 1人(大阪府)、出雲市 8人(島根県)、宮崎市 8人(宮崎県)

○団体

福島県看護協会 2人

○企業

東京電力株式会社 3076人



広野町の復興のために全国から集まった派遣職員(平成24年5月16日)



### 3 物的支援

○物資（資料が現存するものだけを掲載）

#### 食料

アルファ米 5,409食、缶詰類 404缶、ジュース類 1,368本、カレー類 738食、クラッカー類 519箱（缶）、シリアル 120箱、粉ミルク 77缶（箱）、離乳食 8食、スープ 60缶、飴 180袋、ドリンクゼリー 1,293食

#### 衣料品など

下着、毛布、レインコート、長靴ほか多数

#### 衛生用品

トイレットペーパー 6,260巻、ティッシュペーパー 4,561箱（袋）、ごみ袋 12,000枚、生理用品 16,927包、マスク 78,553枚、おむつ 1,334包、せっけん類 8,407個（本）、ウェットティッシュ類 18,747包、消毒液 1,838本、洗剤 61,333本（箱）、歯ブラシ類 7,557本、歯磨き粉 139本、シャンプー 1,950本、洗浄綿 178包、熱取りシート 224包、入れ歯洗浄剤 13,088包、水袋 200個

#### 雑貨類

タオル類 20,704枚、カイロ 4,666枚、ポリタンク 513個、電池 4,680本、傘 610本、椀類 1,085個、皿類 195枚、箸 14,280膳、スプーン 400本、フォーク 130本、コップ類 863個、哺乳瓶 100本、お盆類 144枚、手袋 2,644組、湯たんぽ 12個、カセットボンベ 248本、スポンジ 6,240個、布テープ 284巻、ハンカチ 293枚、ラップ 2,471本、レジャーシート 52枚、風呂敷 63枚、吸収缶 25個、しゃもじ 27本、タッパ 25個、調乳セット 1組

#### 家財道具など

自転車 63台、全自動洗濯機 17台、全自動乾燥器 5台、テレビ 2台、ランドセル 67個、卓上コンロ 3台、ポット 25台、LEDライト 240本、携帯ラジオ 18台、体温計 20本、血圧計 1台、椅子 18脚、机 9脚、工具セット 31組

#### 携帯電話（貸与、順不同）

ソフトバンクモバイル株式会社、KDDI株式会社（au）、株式会社NTTドコモ

○車両（平成26年3月31日まで、順不同）

サウジアラビア ABDUL LATIF JAMEEL社

成都正恒动力配件有限公司

ワタナベ様（埼玉県）

プジョー・シトロエン・ジャポン株式会社

大阪城南ロータリークラブ・台湾豊原北区ロータリークラブ

東亜合成株式会社

本田技研工業株式会社（貸与）



大阪城南・台湾豊原北区の両ロータリークラブが軽トラックを寄贈（平成25年5月22日）

掲載させていただいたのは、頂戴したご支援のうちの一部です。  
これ以外にも、ボランティアなどの人的支援、食料品や衣料品  
などの物的支援を全国の皆さんから頂きました。  
尊いご厚志に、心から感謝いたします。

## 4 三郷市

広野町と埼玉県三郷市とは、常磐自動車道で結ばれていて時間的な距離は近いにもかかわらず、地理的には同時被災の可能性が少ないことから、平成20年7月29日に広野町役場で「災害時における相互応援に関する協定」を締結しました。

三郷市は、東日本大震災の直後から広野町に食料などの支援物資を輸送するとともに、給水車を派遣しました。そして、瑞沼市民センターに一次避難所を開設して、最大で267人の町民を受け入れ、小学生14人と中学生8人が平成23年度の1学期まで三郷市の学校へ通いました。

また、平成23年12月から継続して広野町へ職員を派遣し、現在も継続中です。

## 5 伊東市

広野町と静岡県伊東市とは、20年以上前に広野小学校器楽部と広野町公民館弦楽器教室が、伊東市少年少女合唱団と交流したことをきっかけとして、長く交流が続いていて、「伊東温泉めちやくちゃ市」にも出店を続けています。広野町は、平成19年10月、広野町で生まれ育ち、伊東市でホテル経営の傍ら、伊東市少年少女合唱団の顧問も務める北岡貴人さんを、広野夢大使に任命しています。

広野町と伊東市とは、震災直後の平成23年7月28日に広野町役場湯本支所で「災害時等の相互応援に関する協定」を締結しました。伊東市は、その協定に基づき、平成23年12月に2人の保健師を広野町へ派遣しています。また、伊東市の合唱団シャンテは、ひろの童謡まつり音楽祭に出演し、広野町など被災地の様子をまとめたパネル展示をするなど、広野町を支援しています。

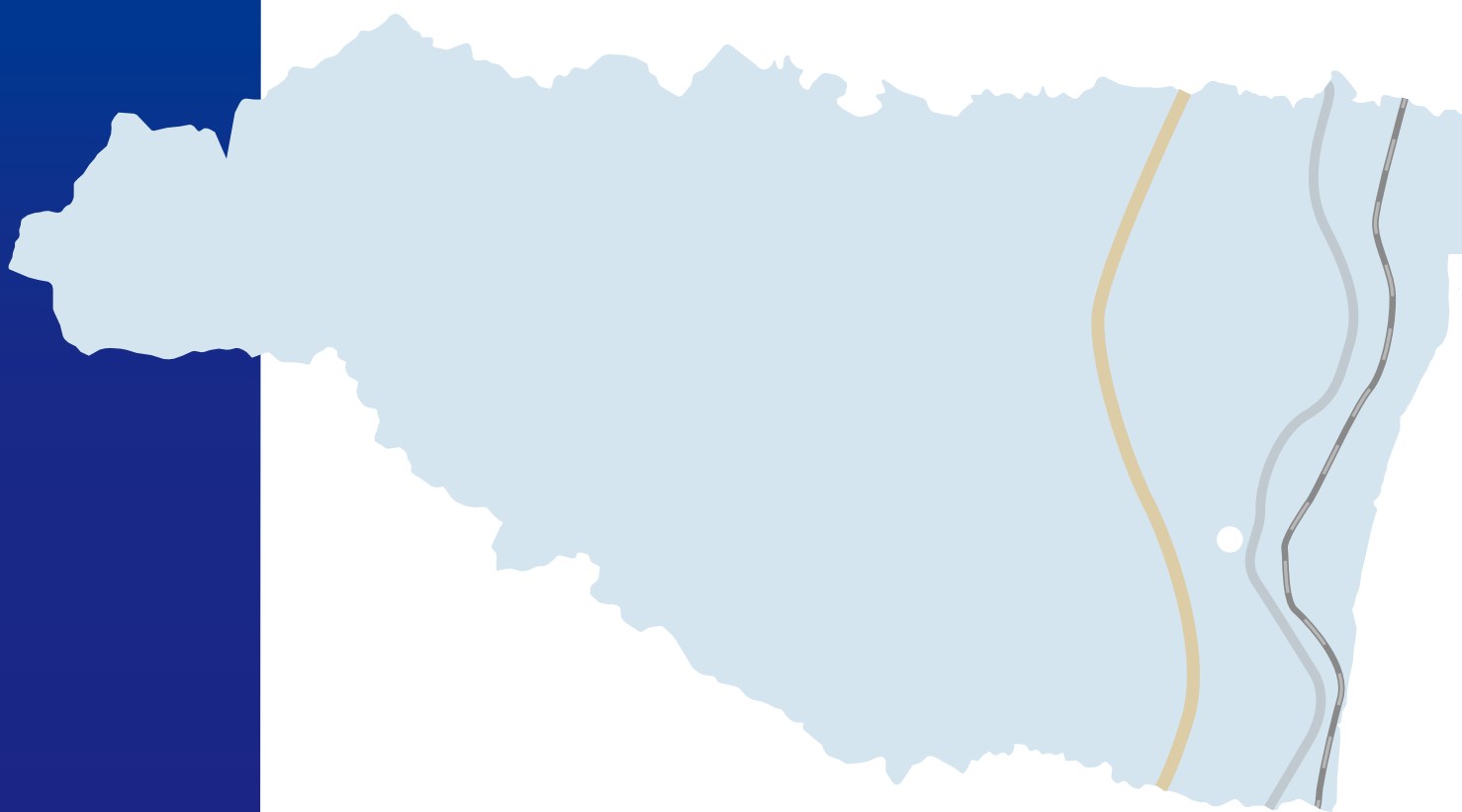


ひろの童謡まつり音楽会で歌う合唱団シャンテ（平成25年10月20日）

# V

## 写真で見る東日本大震災

※掲載した写真には、津波被害の写真が含まれています。





# 震災直後



下浅見川久保、  
松下、本町地区  
(平成23年3月11日)



下浅見川久保地区  
津波第1波が襲来  
(平成23年3月11日  
15時29分)  
双葉地方広域市町  
村圏組合消防本部  
提供





浅見川河口部坊田  
橋付近  
(平成23年3月11日)



浅見川河口部坊田  
橋付近  
(平成23年3月11日)



下北迫字久保田地区が津波に飲み込まれた  
(平成23年3月11日)



公民館や中学校には、多くの人が避難





マイカーでの避難



地震で頭が落ちた  
延命地藏尊  
(平成23年3月11日  
15時11分)  
双葉地方広域市町  
村圏組合消防本部  
提供



北迫川に津波が  
逆流  
(平成23年3月11日  
午後4時26分)  
松本ミツさん提供



津波被害にあった北釜地区





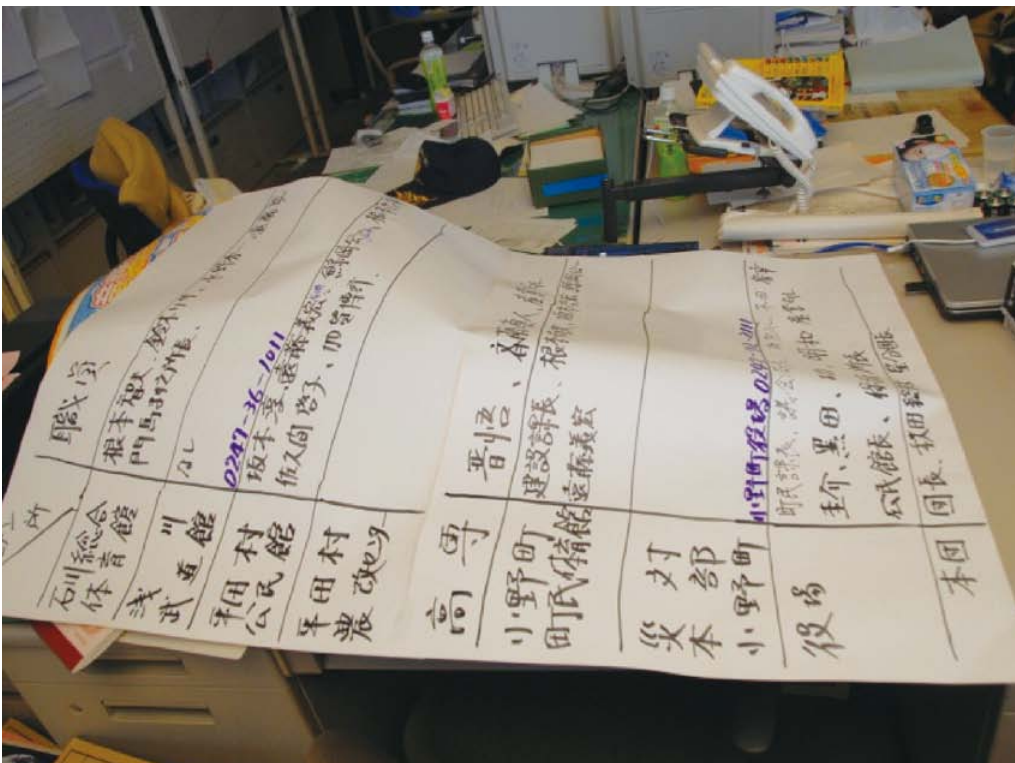
津波被害にあった  
浄化センター



崩壊した国道6号線  
二ツ沼地区  
(平成23年3月11日)



役場庁舎は、地震により書類が散乱（平成23年3月11日 15時5分）

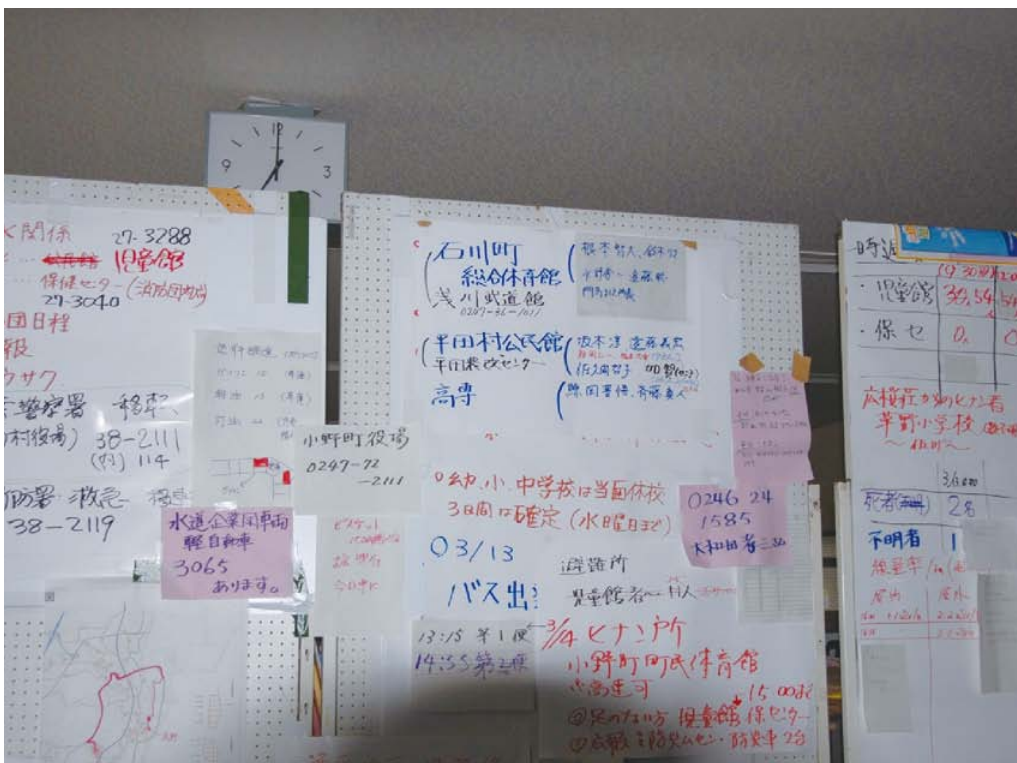


地震により電気が寸断され、パネルに重要な情報を張り付け、情報を共有した（平成23年3月15日 7時）





役場庁舎内の張り紙で、グループに役割を割り当てたのが分かる



連絡先など分かる情報は、すべて張り出した

# 一次避難



平成23年3月15日  
から小野町体育館  
に役場災害対策本  
部を移転



多くの町民が小野  
町の体育館に避難





平成23年3月17日  
から、広野町民約  
100人が災害時応  
援協定を結んでい  
る三郷市瑞沼市民  
センターへ避難



平成23年5月21日  
三郷市長が避難所  
を訪問



# 二次避難



平成23年5月29日から9月11日まで二次避難所となったスパリゾートハワイアンズ



役場機能を小野町  
からいわき市常磐  
地区へ移転  
(平成23年4月15日)



湯本支所で行われ  
た平成22年度広野  
小学校の卒業式  
(平成23年7月23日)





いわき市立中央台南小学校を間借りして広野小学校を再開  
(平成23年8月15日)



いわき市内各所から間借りの広野小学校へスクールバスで通う児童



緊急時避難準備区域解除に伴う説明会を開催  
(平成23年10月27日  
いわき市立中央台東小学校体育館)



平成24年3月1日に、  
役場機能を本来の  
庁舎に戻すため引  
越しの準備を進め  
る職員



# 三次避難



いわき市中央台  
高久第四応急仮設  
住宅盆踊り  
(平成23年8月23日)



いわき市常磐迎応  
急仮設住宅の復興  
祈願祭  
(平成24年3月10日)





いわき市四倉町鬼  
越応急仮設住宅の  
切り絵お披露目会  
(平成24年4月22日)



いわき市四倉町鬼  
越応急仮設住宅の  
緑のカーテンプロ  
ジェクト  
(平成24年6月8日)

# 応援 支援



全国から多くの支援物資が届き協力して運搬した  
(小野町)



復興サッカー教室  
(平成25年1月19日)





福岡純真学園大学  
からのメッセージ  
(平成23年10月22日)



広島県福山市から  
のメッセージ  
(平成25年3月1日)

# 除 染



平成24年2月から  
開始した生活圏内  
から20メートルの  
除染



平成24年11月から  
本格的に開始した  
農地除染



# 復 興



平成24年8月27日から、広野小学校、広野中学校、広野幼稚園、広野町保育所を、町内の本来の建物で再開



震災後2年ぶりに  
開催したひろの童  
謡まつり音楽祭  
(平成24年10月14日)



広野町代表として  
ふくしま駅伝に参  
加したJFAアカデ  
ミー福島選手  
(平成24年11月18日)





3年ぶりに広野町  
で行った広野小学  
校の運動会  
(平成25年5月18日)



災害公営住宅建設  
予定地で発掘した  
「桜田Ⅳ遺跡」の現  
地説明会  
(平成25年5月18日)



広野町サマーフェス  
ティバルの打ち上げ  
花火を観るために  
里帰りする町民も  
(平成25年8月11日)





平成25年8月24日  
から保健センター  
でホールボディー  
カウンターが稼働



集合住宅38戸、戸  
建て住宅10戸の災  
害公営住宅  
(平成25年9月26日  
起工)



3年ぶりに出荷した  
広野産米を首相官  
邸に贈呈  
(平成25年10月25日)



3年ぶりに出荷さ  
れる広野産のコメ  
を全量全袋検査で  
食の安全性に万全  
を期す





広野町中央体育館  
で行われた檜枝岐  
歌舞伎の復興支援  
公演  
(平成25年11月15日)



愛媛県から届いた  
みかんを手にする  
広野小学校の児童  
(平成25年12月5日)



3年ぶりに「みかんの丘」で行われたみかん狩り  
(平成25年12月17日)





卒業旅行で広野中  
学校を訪れたJFA  
アカデミー3期生  
(平成25年12月20日)



広野町の成人式に  
参加したJFAアカ  
デミー福島1期生  
(平成26年1月4日)



常磐自動車道の広野IC～常磐富岡IC間の再開通祈念植樹を行った  
(平成26年1月30日)



JR広野駅に到着したポケモン列車  
(平成26年2月1日)





東日本大震災追悼式で黙とうをする参加者たち(平成26年3月11日)

福島県広野町東日本大震災の記録〔I〕  
『ふる里  
“幸せな帰町・復興”への道のり』

---

企画・編集 広野町東日本大震災の記録編集委員会  
編集委員（敬称略）鈴木正範、松本登志枝、坂本光子  
佐藤栄子、石丸純一、高木竜輔

発行 福島県 広野町  
〒979-0402 福島県双葉郡広野町大字下北迫字苗代替35番地  
☎ 0240-27-2111



ふる里

広野町を未来へ届けるために……